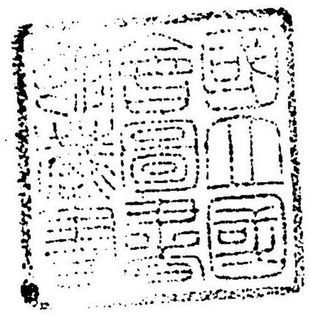
偈

南京圖書館藏

當涂縣

雜

292.209
A863r



昨春新門主猊下清國巡遊の途に上らせらるゝや門末一同深く其御盛擧を贊し奉ると同時に長途の御旅行殊に大陸内地を御通過あらせらるゝと聞き窃に無事の御歸朝を祈り奉りしに幸にして何の御恙も無く御歸山相成り一同初めて安堵の思ひを爲せり、此度本誌編纂に付　猊下には特に左の御親諭を發せられ廣く門末に對して巡遊の御趣意を明にせらるゝと共に現今の時勢に適切懇篤なる訓示を與へ給へり一宗の道俗謹で拜讀し奉り克く御趣意の在る所を體して且暮過ちなきを期すべき事肝要なり

32164

御親諭

余が昨春清國巡遊の途に上りたる趣意は大畧本書の序論にも在る通り國家の前途と宗教の將來とに付て深く考ふる所あるに因る、皆々承知の如く昨年七月以後條約改正實施となり維新開國の國是此に完了し立憲政治の基礎愈々確固たるに至れるは偏に叡聖文武なる　天皇陛下の御稜威に因るものなればる忠良なる國民は篤く御盛德の程を感戴し奉り一層奉公の念を運ばいでは相適はぬ、わけて我二諦の宗義を聞信し平生護國扶宗を以て報恩の經營と心得居る門末の徒に在りては尙更の事である

斯く條約改正實施となり歐米の諸强國と對等の地位に伍する

事となりたるは東洋各國に絶て其比を見ざる所にして我邦のみ獨り此景命に膺る實に無上の名譽と云はねばならぬ、萬世一系の皇統は是れより倍々尊嚴を加へんとし國家の希望と責任とは更に重大ならんとするに至りたれば此際國民たる者は公に付き私に付き奮發督勵するの覺悟が肝要である

凡そ立憲政治の要は協同和衷の實を盡すに在り、如何なる善政と云へども國民の心が區々になりては之を行ふことは出來ぬ、行ふて治績を擧げんことは亦固より難矣、去れば明治元年五條の御誓文にも「上下心を一にして盛に經倫を行ふべし」と仰せられてある通り是れゞ寔に立憲政治の骨髓にして開國進取の大基礎である、上下の心が一になりてこそ初めて協同も出來、和衷も成る譯なるが之に反して上下の心が離れ〳〵

になりたらば、縱令ひ廟堂善く謨り議會善く議すとも決して善政良法を行ふことは出來ぬ、故に國民たるものは勤勉以て業を勵み忠良以て公に奉じ憲法に恪遵して法律命令の定むる所に背かず國家の組織と經營とに必要なる納稅其他諸般の義務に服從せざる可らず、況や眞宗念佛行者の徒に於ては現世のみならず來世までも王法の恩澤を蒙ることと深き身なれば一入報國盡忠の誠を抽んでいでは相適はぬ

世界の文明は日に月に進歩して事物の開發は年々其面目を改め殆ど底止する所を知らざる勢ひなるが是に付ても杞憂に堪へざるは此の如く一方に智識の進歩すると同時他の一方に倫常道德の次第に退歩の傾きを生ずる事である、或は云ふ文明の社界は功利の社界にして道德の社界にあらず智識の世にして

同情の世にあらずなど世に新奇の說を唱ふるもの無きにあらざれども是は甚敷誤謬にして眞の文明とは決して此の如く一方に偏したるものではない、眞の文明は智德並び進み情誼兼ね臻るものでなければならぬ、然るに今日は未だ此の場合に至らず動もすれば人をして文明とは智力を以て相競ひ物質を以て相爭い世界は唯二三强國が私慾を逞ふし權勢を擅にする競爭舞臺なるかの如く思はしむるに至るは人道の爲め甚だ悲しむべき事である、今や世界列强の眼は一齊に東方亞細亞に注ぐに至り清國は恰も之が孤注たる姿となりて二十世紀の序幕は何等か彼國に於ける政治的意味の變動、若くば列强が利益の衝突に因て開始さるべしとは東西識者の一致したる意見である、果して然らば清國と僅に一葦帶水を隔て唇齒輔車

の關係を持てる我邦が獨り晏然として傍觀の地に立つを得べきや否深く考ふべき事である、而して將來縱令如何なる事變が起るにもせよ結局は國力の充實に待て初めて何事をも措辦し得べきものなれば國民が平生の覺悟としては亦唯業を勵み産を殖し信義を篤ふし智識を磨き一旦有事の日は己を忘れて義勇公に奉ずるの精神を養ふに在るのである、

余や方外の身、固より直接に政治上の責任あるにあらずと云へども然れども生れて聖代の恩波に沐浴し安んじて一宗弘通の任に當る身なれば、せめては皇恩の萬一に報じ奉らんとの念願より此度の巡遊に付ても心窃に期するところありしなり、顧ふに清國と我邦とは啻に同文同種なるのみならず又實に同一佛教を奉ずるの國なれば彼にして若し一朝爪分の虞あらん

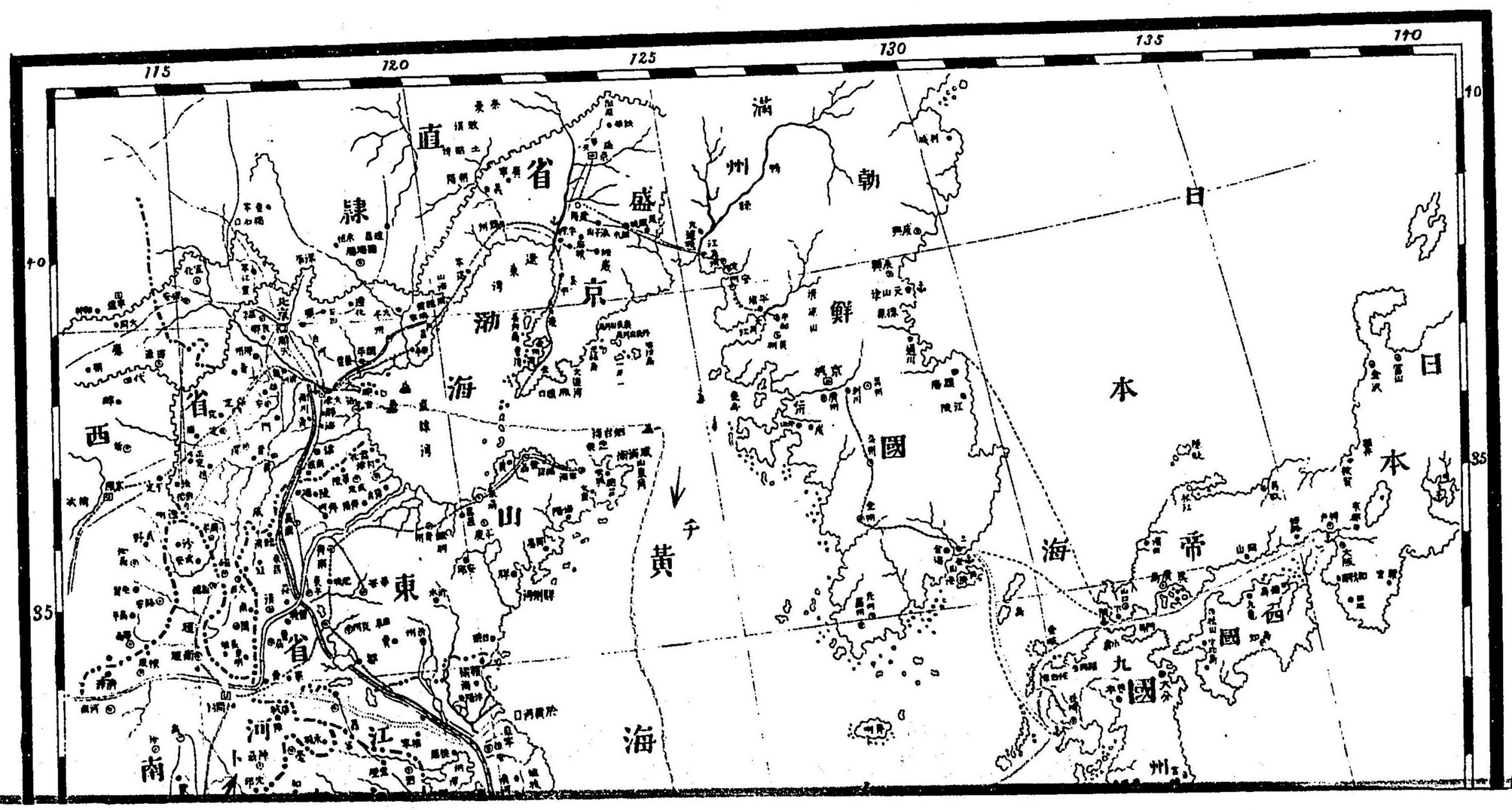
か我獨り之が影響を蒙らざらんや、然ば則其蒙を開導し其陋を啓發し其をして文明の域に進ましめ依て以て列强が窺窬の念を未前に防遏せん事は固より善隣扶植の大義なりと云へども抑亦國家自衛の必要上止むべからざるものあるに因ると云はねばならぬ

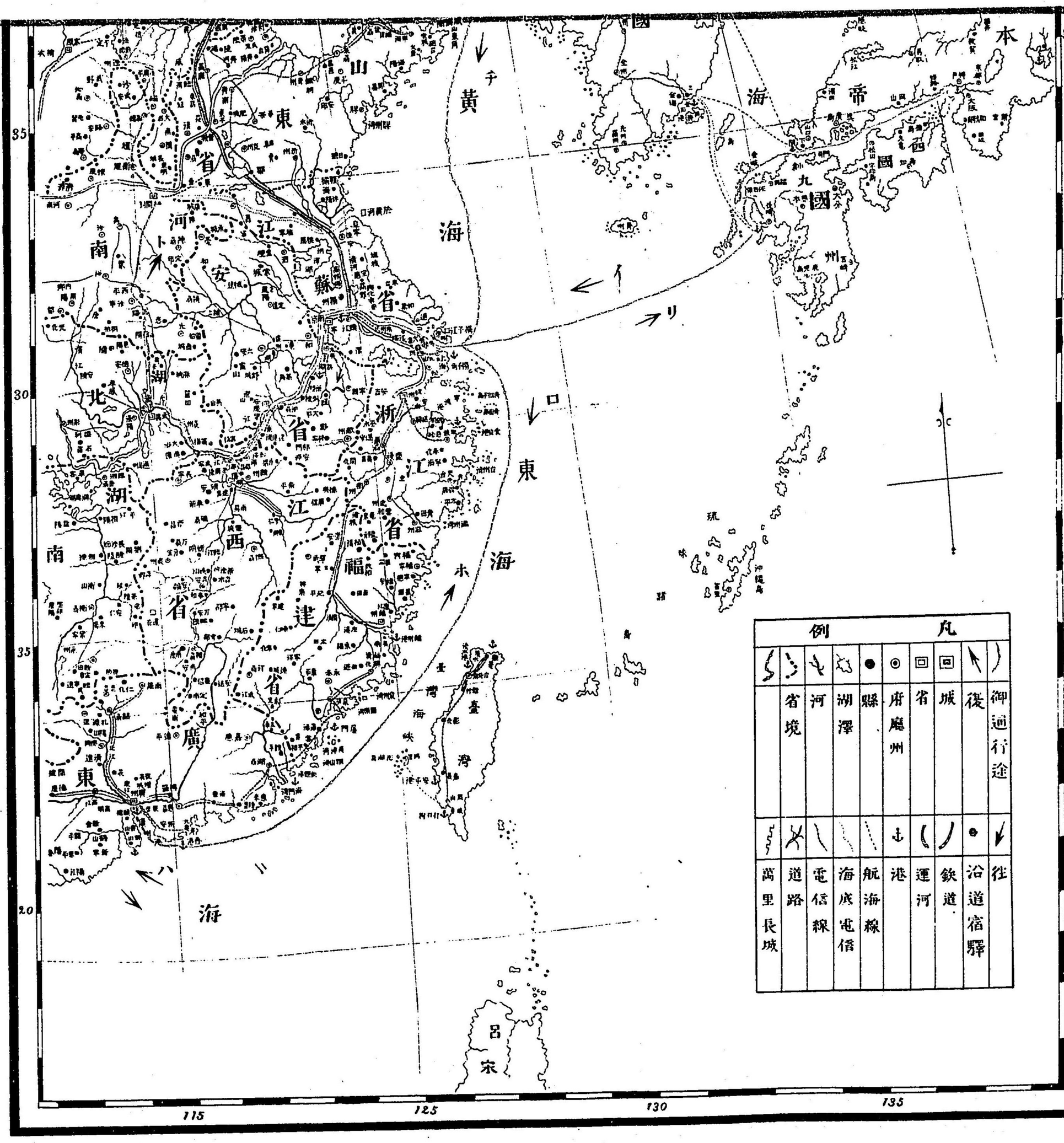
清國の佛教は現今殆ど衰殘の極に達し國内到る處大小の寺院は多く荒廢に歸し軒落ち柱傾き木佛塑像は空敷風雨の浸蝕する所となり人をして轉た感慨の念に堪へざらしむるものありと云へども然れども其國に於ける菩提の種子は未だ全く枯渴せるものとは觀るべからず、榮枯盛衰は物の常なれば佛教亦此常理を免る能はず、唐宋以來近く元明に及ぶまで左しも盛大を極めし彼國の佛教が今日此の如く衰へたりと云へども未

だ之を以て絶望すべきではない、之を振ふに其人を得之を興すに其道を以てせばいかで頽瀾を既倒に廻し墮緒を茫々に紹ぐことを能はざらんや、而して之を振興するもの我邦の佛教徒を除いて他に其人はない、余此度親敷其地を踏み現在り其狀を睹廢墟を弔ひ遺跡を尋ね仰て古の盛なりしを思ひ俯して今の衰ふるを考ふれば幾度か不覺の涙に旅の衣を霑したり、是に付ても喜ぶべきは我邦念佛行者の身の上である、國民としては世界强國と對等の地位に伍することを得て東洋無比の名譽を負ひ佛教者としては弘願他力の要法を聞信し即得往生の極果を得る身となりたるは現當二世の仕合せ生々世々の幸福と云はねばならぬ、併しながら是れ偏に　天皇陛下の御聖德と佛祖矜哀の慈恩とによるものなれば朝旨に服從の義務を

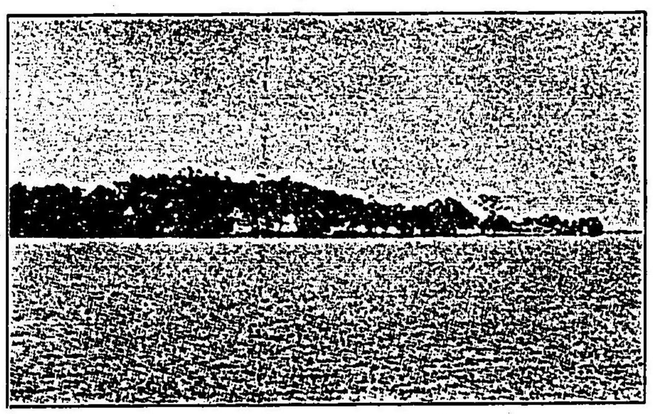
怠らざるやうに各自業を勵み行を愼み帝國々民の面目を汚損せず苟且にも朝夕報恩の經營を怠りては相ならぬ

此度淸國巡遊の志を遂げ無事に歸山して素懷の一端を酬ふことを得たるは余が甚だ滿足に思ふところなれば此に聊か其趣意を明にして遍く門末に諭し示すところなり、返すがへすも二諦の教旨に戾らず護國扶宗の心掛が肝要である

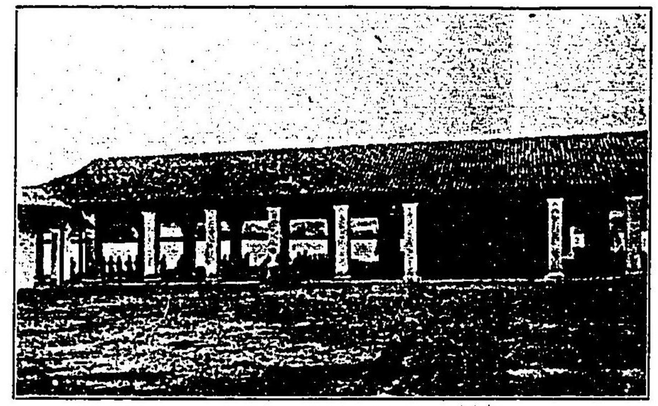

115
120
125
130
135
140
40
35
直隸省
盛京
滿洲朝鮮國
日本
日本
西省
渤海
山東省
黃海
河南
江蘇
九州
西國
帝國
海


凡例
御通行途
復
城
省
府廳州
縣
湖澤
河
省境
往
沿道宿驛
鉄道
運河
港
航海線
海底電信
電信線
道路
萬里長城
黃海
東海
日本海
琉球諸島
臺灣海峽
臺灣
呂宋
東南
廣西
福建
浙江
江蘇
安徽
湖北
湖南
河南
山東
35
30
25
20
115
125
130
135

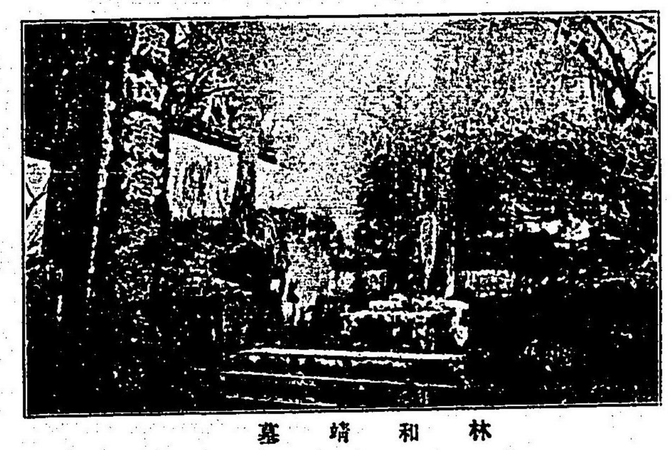
雷峰塔（杭州）



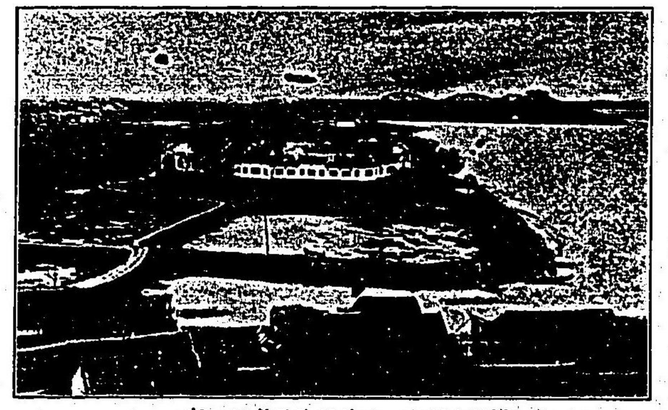
孤山の前面



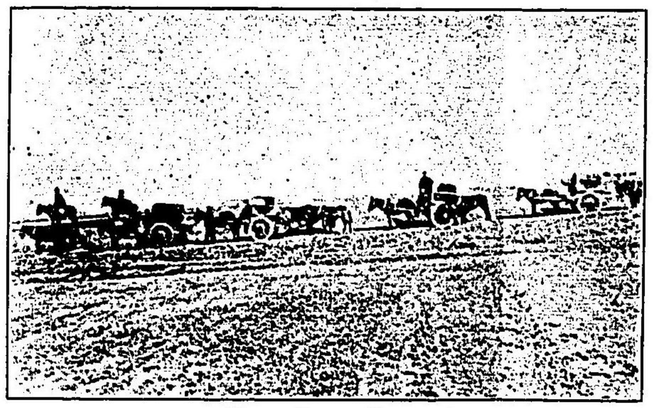
武昌武備學堂



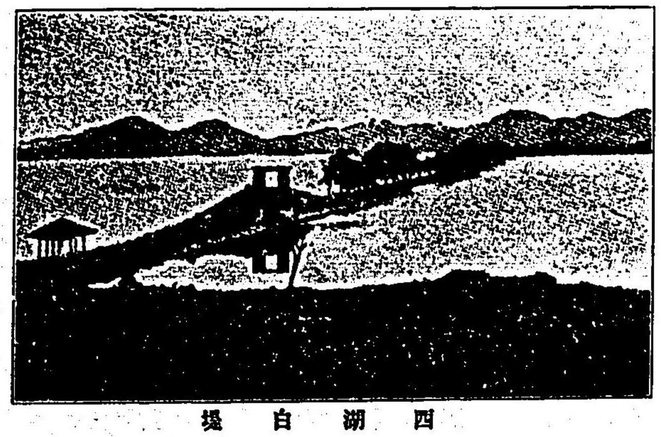
林和靖墓



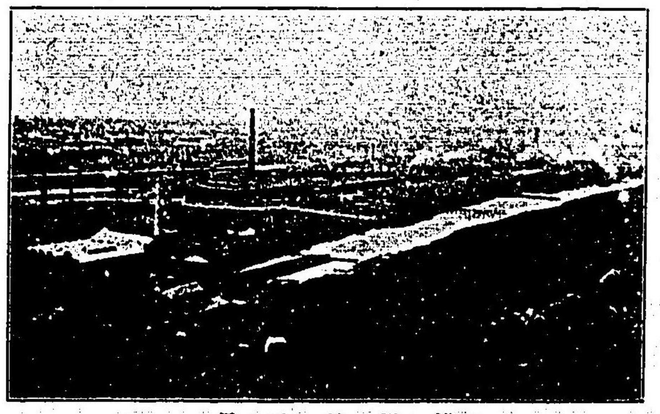
漢陽大別山ヨリ伯牙臺及月湖ヲ望ム



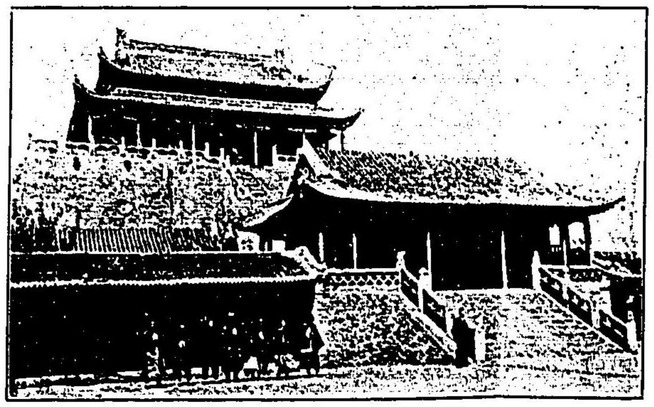
大陸旋行



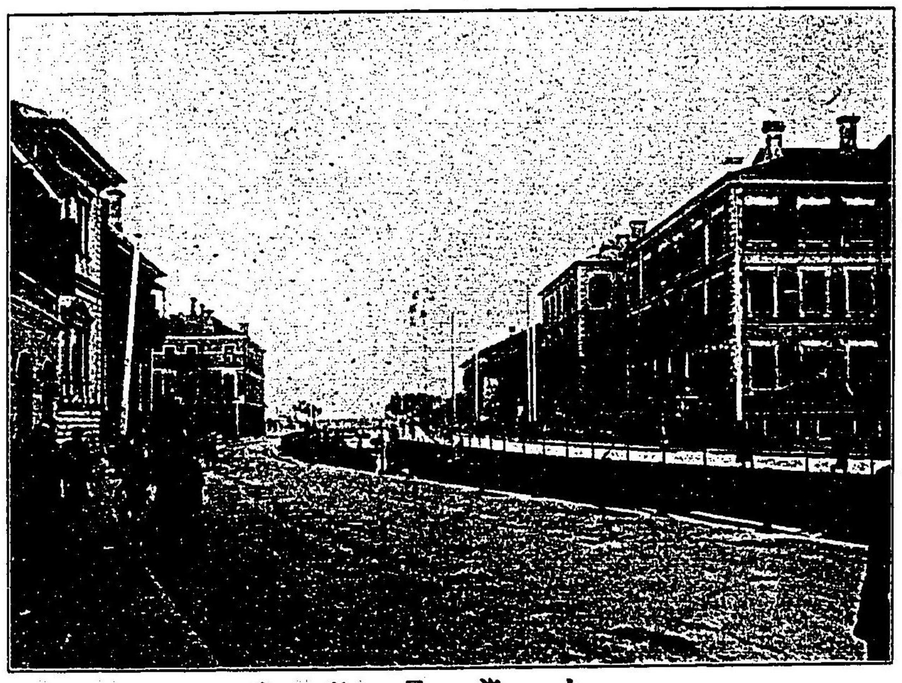
西湖白堤



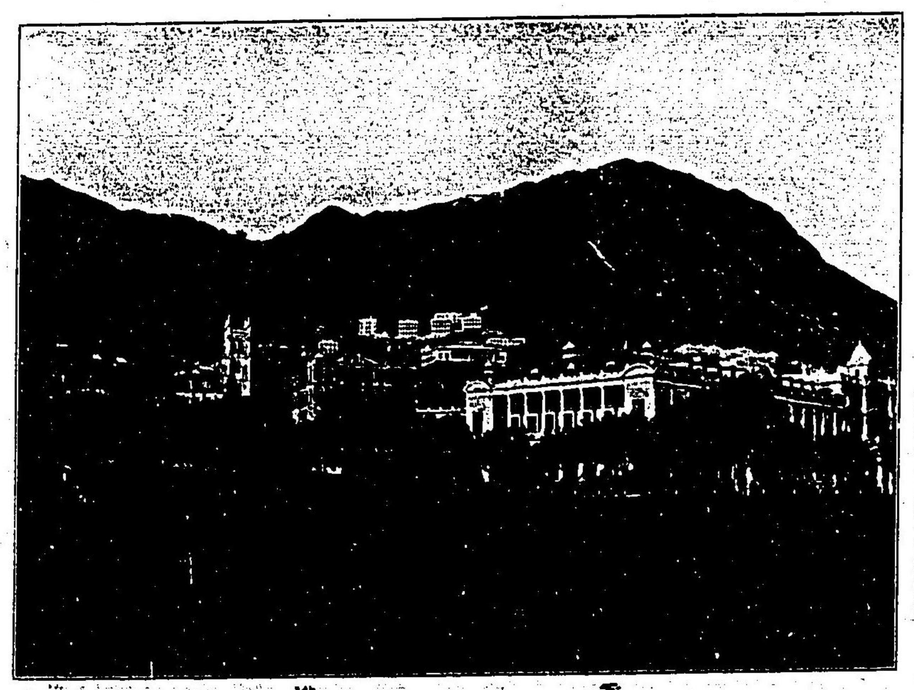
漢陽鉄政局



開封府龍亭殿

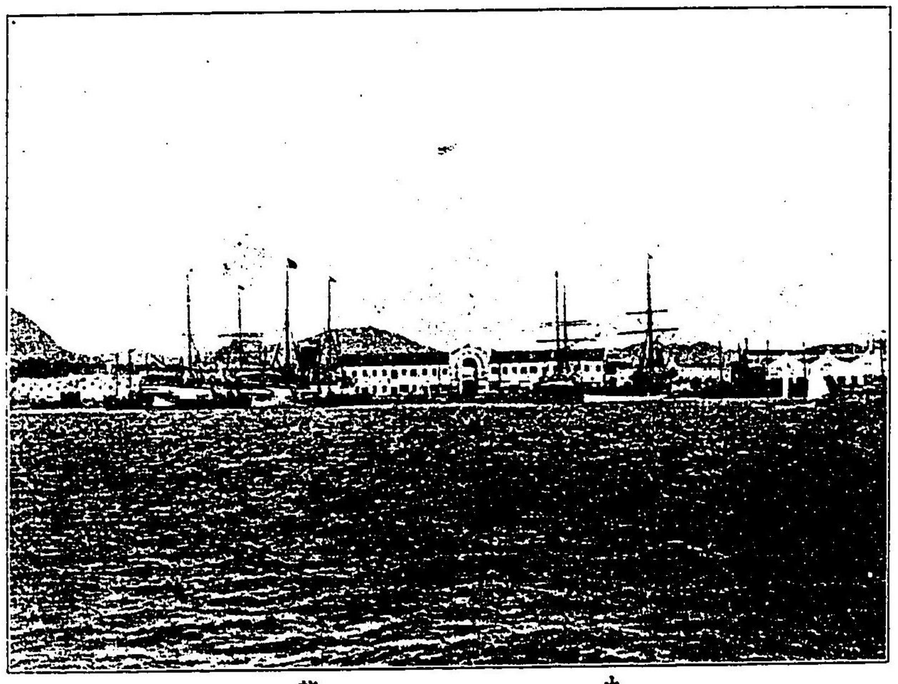


上海居留地



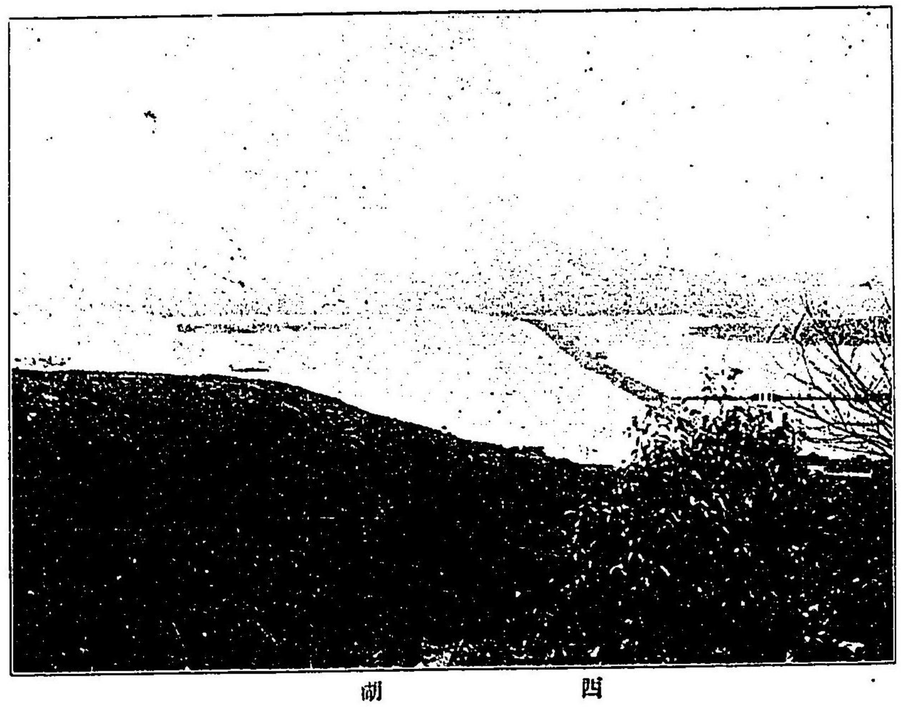
香港

（東京田中猪太郎製版）

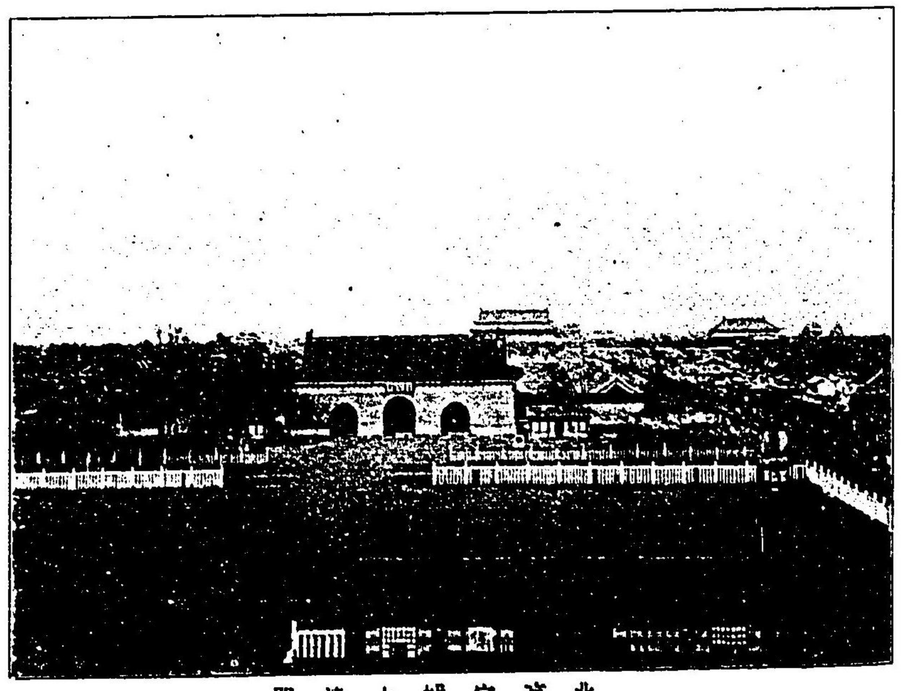


九龍

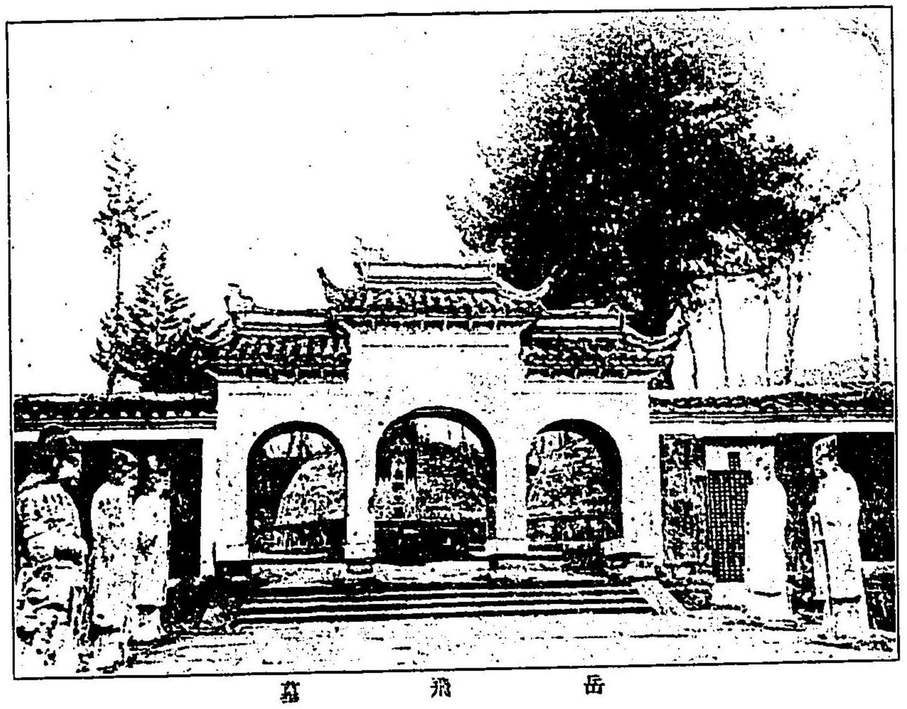
カントン



湖　　西



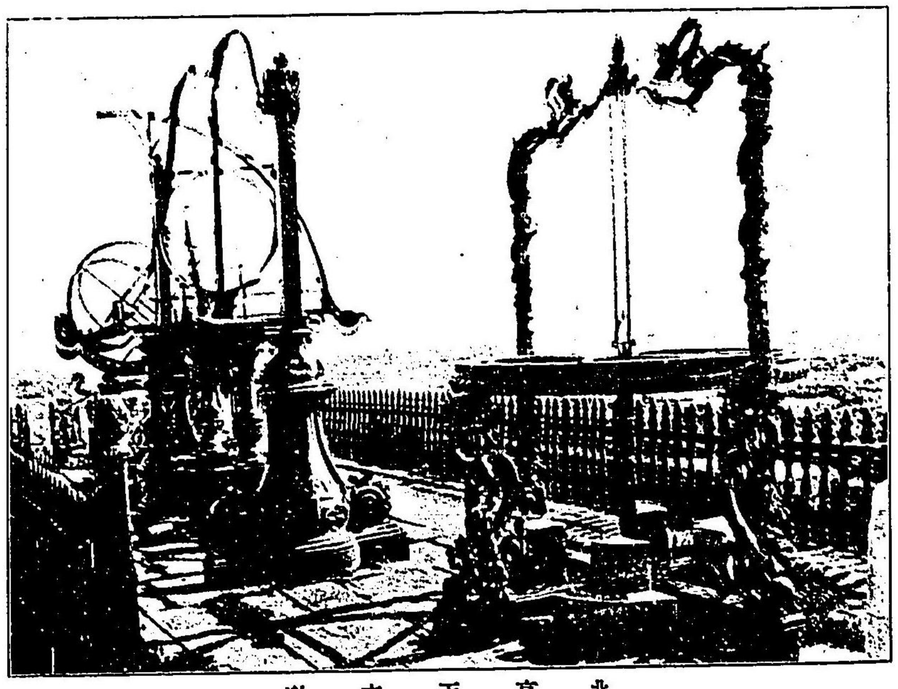
北京宮城大清門



墓　飛　岳

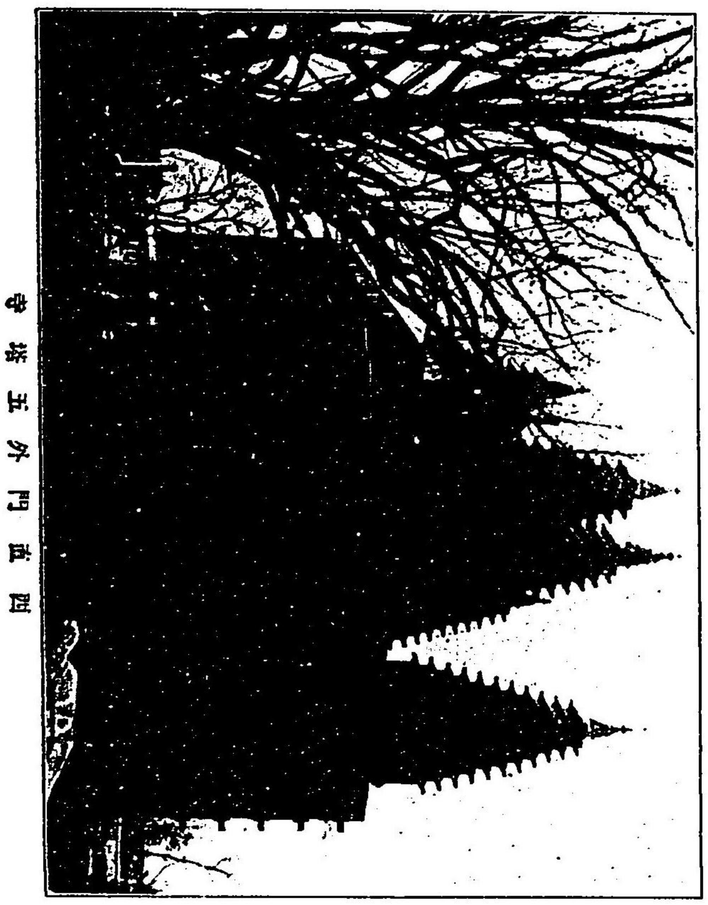
北京城壁ヨリ正陽門ヲ望ム

ハキンン京街



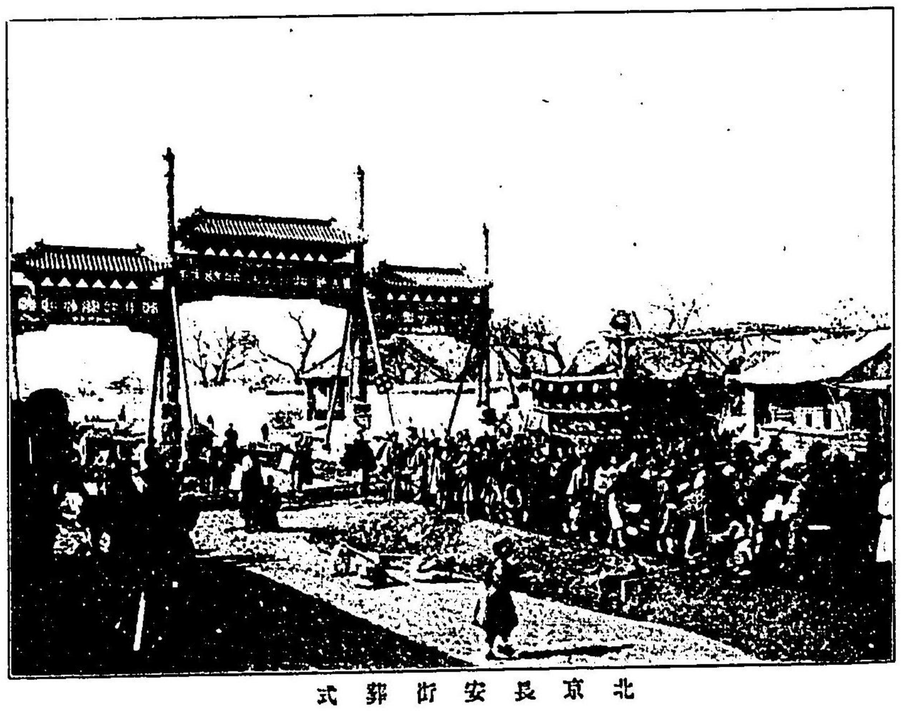
北京天文臺

（幸福湖）寺庙外门定安庙北

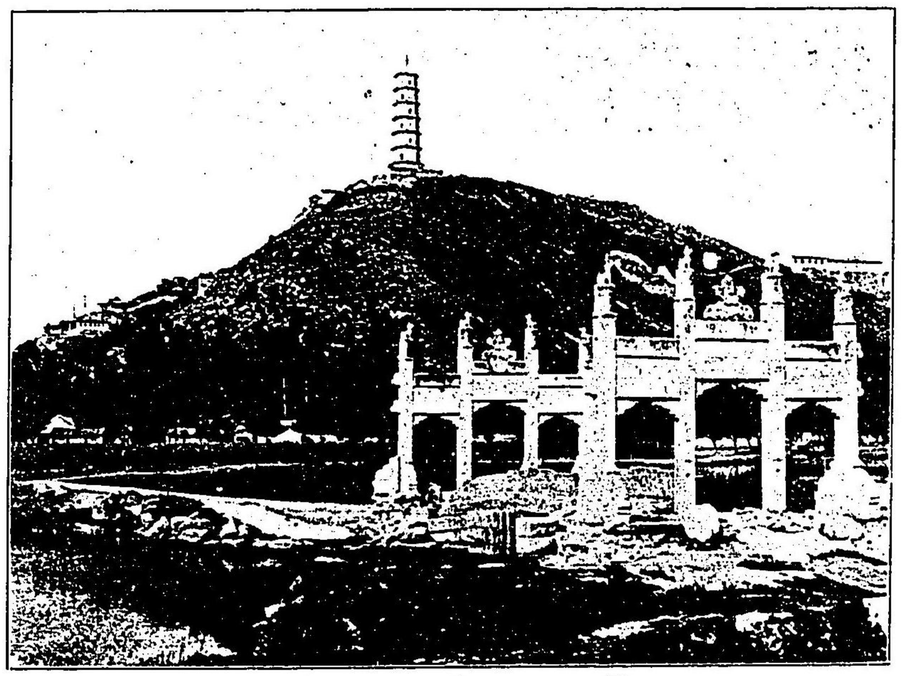


寺庙王外门庙庙

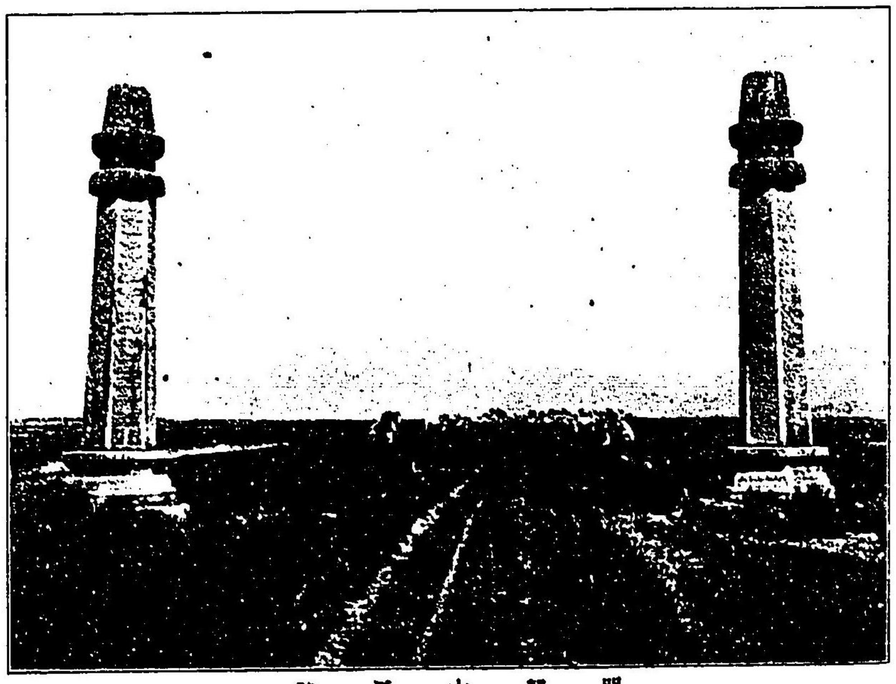
支那人婚儀の行列花轎



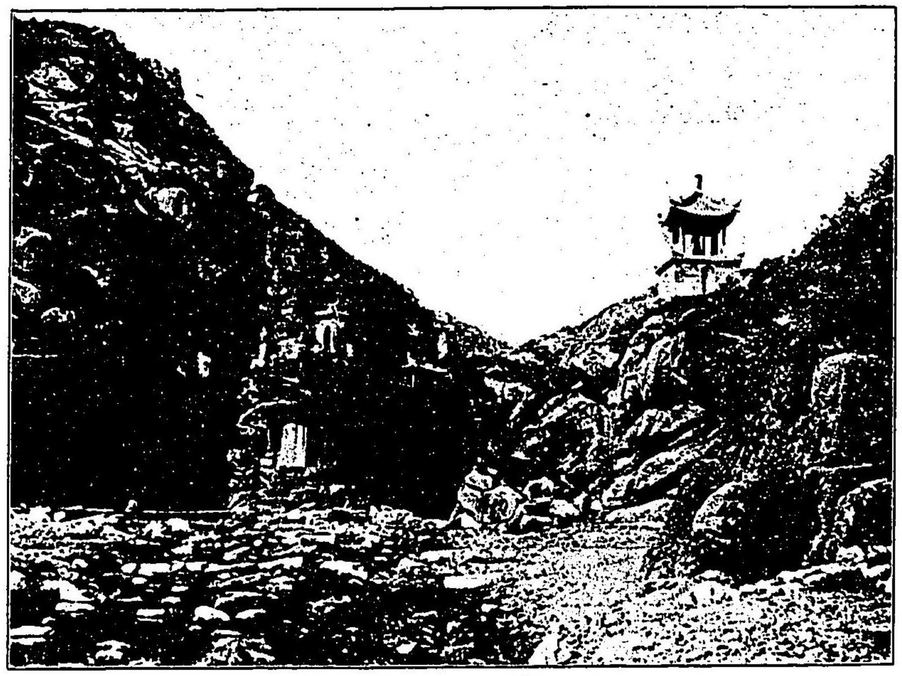
北京長安街葬式



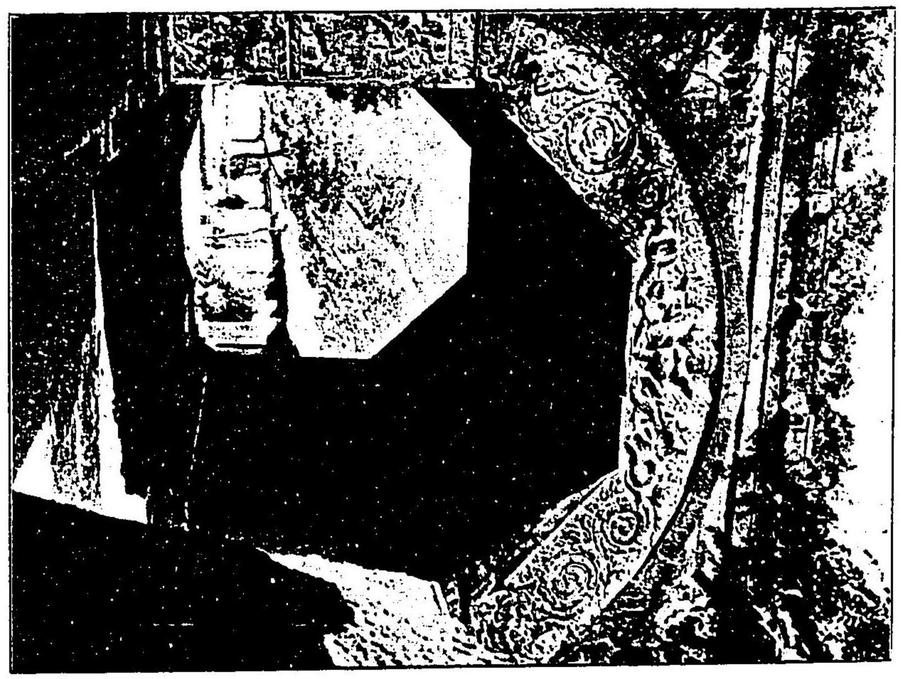
玉泉山



明朝十三陵



長城彈琴峽



居庸關

子　彈　所　擊

萬里長城八達嶺之景

凡例

一此書題して清國巡遊誌と云ふときは清國巡遊の日誌なることは云ふ迄も無し然れども本書の首に載せたる　新門主猊下の御親諭と本書の第一章序論とを一讀せば　猊下今回の巡遊が決して尋常觀光の遊にあらざりし事は明なり然らば苟も此書を讀まんもの一宗門末の徒は固より然らざるものも亦唯尋常觀光の日誌を以て見るべからざるは勿論ならん抑も清國渡航は近來一種の流行の如くなれり政治家も行き實業家も行き文學家も行き宗教家も亦將に大に行かんとす是れ將た何に依て然るか必ず其故なくんばあらず而して之が原因一二にして足らずと云へども要するに東洋氣運の影

響にして畢竟清國なる問題が極東に於ける歐州列强の競爭より端なく我邦人の注意を喚起し其成敗興亡が我の利害得喪に極めて密接の關係を有するものなる事を自覺したるの結果に外ならず

一本邦古代の開發が多く佛教に負ふ所あるは今更めて云はず唯夫れ支那は我より云へば實に佛教の母國なり唐宋以來さしも盛大を極めし佛教が今日彼が如く衰退せるを視ては苟も心あるもの誰か慨然たらざらん況や我邦の佛教徒たるものに於てをや且佛教をして將來世界的大宗教と爲さんと欲せば現時の如く獨り我邦に在りて徒に諸宗割據恰も封建的陋態に甘んじ孤立的地位を守る事の甚だ不利益なるは明白なれば能く此の大目的を達せんには是非とも世界的布教の方針を執らざるべからず近來佛教徒も少敷覺るところありしと見に海外布教の聲漸く各宗の間に反響せらるゝあるを聞くは空谷跫音の感なきにあらず甚だ喜ぶべきの至りと云ふべし近く我に隣接して而も我と同一佛教國なるにも拘はらず今や其國を擧げて頽廢萎靡の極に陷れる清國四億の斯民を後にして根本より宗教、人種、事情を異にせる歐米人を先にせんとするは本末難易を誤まれるものと謂ふべし故に佛教徒にして苟も海外布教を試みんと欲せば勢い清國より先きなるは無く清國より急なるは無し

一清國人は政治的若くは國家的としては今日は殆ど全く救ふべからざる程度迄に頽廢せり然れども一面社會的としては世界稀有の勢力あり氣格ある人種にして歐米人と云へども

私に畏るゝ所なり而して佛教は元來政治的若くば國家的なるよりも寧ろ社會的を以て其至極とするものなれば尚も佛教をして將來世界の大宗教たらしめんには此の如き人種を味方とする事の甚だ必要なるは勿論なり況や彼我同一佛教徒なるに於ては海外布教の教鞭は先づ此人種より着けざるべからず

一清國の佛教は現今頽廢の極に在りと云へども菩提の種子全く枯渴せるにはあらず譬へば廢家の井の汲む人なきが爲め崩壞荒蕪して曾井となりたらんが如し浚渫修理して之を汲むものあらば混々たる清水は必ず再び湧出せん惜ひ哉現今其人なきがため折角の清涼水をして空しく地底に埋沒し四億の民衆をして飢渴の境に彷徨せしむ是れ我邦の佛教徒が

決して傍觀する能はざるところ將に憤然起て自ら其衝に當るの大覺悟を爲すべきの秋にあらずや　倪下今回の擧が尋常觀光の遊にあらずと云ふ所以は是が爲めなりり

一書中記するところの里數は神戸拔錨より上海、香港等を經て漢口着までの海上航程は大抵英哩を以て記し漢口より北京に至る所謂大陸横斷の日々の里程何百何十里とあるは悉く清里を以て記せり是れ内地には外人の通行稀に清里の外其正確なる里數を知るべからざるが故なり

一初めに清國の地圖を附したるは讀者をして先づ之に據て彼國の地理の大體を知らしめ然る後其朱線に據り一見して直に　倪下一行が行通經過の蹤跡を識るを得るの便利を與へんが爲めなり

一書中記するところの地理歴史上の説明は多く大清一統誌、讀史方輿紀要、同簡覽、湖山便覽、歴代輿地沿革險要圖、其他西人の著にてはウェバー氏の地圖等に據りたれば極めて正確を保ち得べきも各地開港場に於ける貿易額及び人口に至りては最近の調査に依りたるも本年々異同を免れざるものなれば昨年と今年と些違なきを期し難し

一本書は元來昨年五月　猊下の歸朝後直に出版の計畫にて編纂者が最初起稿に着手したるは同年七月に在り晩くも其十一月　猊下が再度歐州渡航の出發前には成功の豫定なりしも其後種々の事情ありて豫定の期に遲れ漸く本年五月に至りて印刷に附する事となり大に出版時機を失したるの憾なきにあらざるも本書は本普通營利的出版と異り一は　猊下

御渡清の趣意を明にして庶幾ば我邦の佛教徒が他日清國布教上參考の一端ともなり一は後來の紀念にもならんかとの精神より編纂したるものなれば世間の書肆が只管營利を目的とするが如き時機の如何は問ふ所にあらざるなり

清國巡遊誌

目次

序論……巡遊の御趣意を明にす……一より四五

第一章

文明の弊――救濟の道如何ん――夫れ佛教とは何ぞ――僧侶を一切世間外に驅逐せんとするか――優勝劣敗――有用と無用となり――佛教と社會との關係――過てるかな今の佛教徒――佛教と云ふ亦社會の一事物にあらざるか――佛教は金剛石を以て甘んずべきか――口と舌と手と足と――理論と實際と――空の至極は實と不二――佛教本來の面目――眞宗の本意――社會を對手とし國民を對手とす――東洋の形勢――清國の形勢――清國巡遊の趣意

第二章

御發途……神戸より漢口迄……四六より一三三

本山の達示――七條停車場發車――佛國郵船ラオス號乘込み――神戸港拔錨――關門海峽通過――長崎港上陸――上海着――上海――香港に向ふ――香港――廣東――九龍に遊ぶ――日本人倶樂部設立――監獄署を觀る――香港を發し再び上海に至る――徐家涯に加特利克教會の寺院を訪ふ――運河を遡る――杭州府――西湖に遊ぶ――西湖の勝――鐵塘江の逆潮――三度上海に向ふ――大江を遡る――南京――漢口着――佛國領事訪問――武備學堂、自强學堂、漢陽鐵製局――歸元寺に詣る

第三章

大陸横斷……漢口より北京に到る……一三三より二〇九

大旅行の途に上る――大陸日暮の光景――臭虫腐を螫して寒夢驚く――雲夢大澤の遺趾――信陽州――佛國技師の馬車を得――古城聚義廟――餓莩途に横はる――老翁と問答す――日本とは如何なる國ぞ――朱仙鎭――開封府に達す――龍廷殿に詣る――黄河を渡る――王子比干の墓――邯鄲縣、盧生が祠――滹沱河を渡る――保定府――蓮池書院に吳如倫を訪ふ――北京着――北京

第四章

北京……萬里長城紀行……二三二より二三五

黄寺、黑寺――覺生寺の大鐘――圓明園――萬壽山、昆明湖――居庸關――八達嶺――萬里長城――明の十三陵に詣す――公使館歸着――喇嘛僧正を雍和宮に訪ふ――北京を發して天津に向ふ――太沽拔錨――神戸港上陸――七條着

清國巡遊誌

教學參議部編纂

第一章

序論……巡遊の御趣意を明にす

昨明治三十二年一月十九日　新門主猊下神戸解纜の佛國郵船ラオス號に搭じて、清國巡遊の途に上らせられ、淹留五閲月越て五月三日加奈太郵船インデヤ號にて、海陸恙無く神戸港に御上陸あり、同日直に御歸山相成りたり。

抑も　猊下御渡清の擧あるや、事或は匆卒に出たる如く、當時種々の臆測を逞ふするものありしと云へ

一朝一夕の故にあらず

ども、要するに皆御趣意の在るところを知らざるに因る。猶下の此擧ある固より一朝一夕の故にあらず、東洋目前の形勢に鑒み給ひ、佛教將來の盛衰に關して一日も坐視すべからざるものあり、乃ち斷然たる御決心を以て、此の未曾有の旅行を企てさせられたるに外ならざるなり

顧に輓近文明の弊、漸く社會の膏肓に浸潤し、擧世滔々人々唯目前の名利に泪沒して、倫常秉彝の道日に益々汚下せんとし、之が自然の反響として一般信仰の念は、同時に社會人心の根底より動搖を來し、佛教と云はず基督教と云はず、其他何宗何派を問はず、凡そ是等の各宗教が、往時に在りて一時人類道

義の模範となり、社會信仰の標準となりて、單に宗教としての一大勢力たりしのみならず、延て國家の政治上にまで非常の勢力を收攬せし當時の旺盛は、哀れ一場の夢と化し去りて、今や日一日、年一年、漸次衰退の兆を現はし來りたるは蔽ふべからざる事實となれり。此時に當りて苟も宗教家たらんものは何等の手段により、如何なる方法を以て此危急を救はんとするか、豫め講究するところ無るべからず。而して之が救濟の道固より種々あるべし、教學の二途を振興して、有用の人物を養成するも急務ならん、大に慈善事業を起して、廣く社會の同情を買ふも差當りたる必要ならん、其方法手段の何たるを論ぜず、

佛教とは何ぞや

今日は是れ世の宗教家が、到底何等の施設措畫を要すべきの秋にして、決して袖手傍觀晏然眠食を貪るべからざるは勿論、又只管教理の研鑽のみを事とし、徒に玄を誇り妙を說かず、然らざれば誦經送葬憐みを翁媼に納れ、醉生夢死に一生を終るかを以て滿足すべき時節にあらざるは明かなり。

夫れ佛教とは何ぞや。

或者は之を解して佛教の眞面目は、世間を離れて專ら出世間の經營を爲すにありとし、是にあらざれば眞の佛教徒にあらざるが如く思量せり。而して世間の多數は多分此說に同意したるものゝ如く、僧徒にして少數世間の事に關係して爲すところあらんとするを見ては、其事の何たるを

問はず、直に之を指斥して俗なり凡なりと爲し、批難攻擊殆ど餘力を殘さゞらんとす。一概に世間と云ふ、大體其事柄にも因るべしと云へども、單に世間と云ふの故を以て之を排斥し、一切僧徒を世間以外に驅逐せんと試み、甚敷は樹下石上、若くば所謂出家沙門なる語を取來りて、殆ど直譯的に今日に適用せんとするが如きは、果して正當の解釋なりや否、是等の論者は唯佛教の半面を視て、未だ他の半面を窺はざる、最も狹義なる一說としては可なるも、之を以て佛教の全體なりとは許すべからざるのみならず、大乘實教の眞意義は寧ろ此に在らざるなり、況んや眞俗二諦を以て双資双益とし佛法世法を以て自利々

眞宗一家に於ては殊に其然らざるを見る

唯有用と無用との謂なり

事物の盛衰興亡は一に事物

他の眼目とする我眞宗一家に於ては殊に其然らざるを見る。

優勝劣敗が動かすべからざる宇宙の法則なる事は何人と云へども之を知らん、而して其所謂る優とは何ぞ劣とは何ぞと、仔細に二者の性質と其由て來る所以を推求せば他無し、唯有用と無用との謂なり。一層詳に云へば、社會に有用のものは、自然優者勝者の地位を占めて、倍々盛大に赴き、之に反して社會に無用のものは、劣者敗者の境に立て愈々衰退に就くを免れずと云ふに結着す。是れ人力の然らしむるに非ずして因果必然の數なり。故に事物の盛衰興亡は一に事物其者が社會に對する關係如何と、其關係よ

其者が社會に對する關係如何と其關係より生ずる功力作用の如何に在り

り生ずる功力作用の如何とにありて、決して其他にあらざるなり。

其名に於て、其形に於て、縱令如何に善美なりと云へども、其實質に於て社會人類に無用のものなれば、是れ畵餅と一般のみ、誤て一時の聲譽を博する事はあらんも、終には劣敗の悲境に陷らんは疑ふべからず。即ち動かすべからざる天則なり。苟も此道理にして違ふ無からんか、佛教の前途亦預知し難きにあらず、要は有用と無用とに在るのみ。若し佛教にして社會に一日も無かるべからざる必用物たらば、我より進んで社會に棄てられんことを希ふも、社會は決して我を棄てざるべし、何となれば之を棄てんか、

過てる哉今の佛教徒

自家が無用地を轉じて有用地と爲すべし

其社會は忽ち暗黑に閉ぢられ、其人類は相卒いて永久大なる不幸に沈淪すべければなり。

過てる哉今の佛教徒、內に自ら省みる事をせず、近時世間の信仰次第に冷却し、隨て其勢力復昔日の比にあらざるを慨し、或は之を以て政府施政の失に歸せんとし、或は以て學術進歩の結果として世の唯物論者を嫉惡せんとし、或は外教侵入の故と爲して、漫に外教者を敵視せんとす。何ぞ其れ過てるや。佛教徒にして心實に教法の衰退を憂ひば、盍ぞ速に其本に反らざる本とは何ぞや、曰く自家が從來の無用地を轉じて有用地と爲すに在り。夫れ佛教と云ふ亦社會の一事物にあらざるか、既に

社會の一事物なる時は、其盛衰の原因が社會との關係に依るは言を俟たず。而して其能く古に盛にして今日に衰へたるは豈古に在りては其當時の社會に必用なりしものが、今日に在りて今日の社會に無用となりし爲めにあらざるか、少なくとも漸々無用に屬せんとするの故にあらざるか、若し然らずして齊敷有用なりとせば、何故に古に盛大なりしものが、今日に於て此の如く衰退せしかを解すべからず

夫れ社會は一個の活物にして亦一個の活機なり其の一部分に於て盛衰常無きが如き觀あるも世界の大勢より云ふ時は日夜に進化して片時も一處に淀滯せず、是故に社會の事物にして其生存を永久に持續せんと

佛教今日の衰退は全く社會の風潮に遲れたる結果なり

欲せば是非とも社會と共に進歩發達するの覺悟なかるべからず、然らざれば到頭社會の見棄る所となるに至らん、一度社會に見棄られんか如何に煩悶するも非常の勇氣と奮發とを以て再び追從するに非ざるよりは、結局其の事物は滅亡の非運を免るゝと能はざるべし。是に由て之を觀れば佛教今日の衰退は全く社會の風潮に遲れたる必然の結果なれば、之が救濟の策としては今後唯疾足活歩歴楷して昇るの一事あるのみ、然らずして依々逡巡迷を執て決する所なくんば恐らく佛教と社會との距離は倍々遠ざかる一方にして、遂には其後塵をも望むべからざるに至るも亦知るべからず、徒らに其理の玄妙と經卷の浩

見よや彼の金剛石を

瀚を以て他に誇示せんとするは佛教社會の通弊なるが、是れ抑も大なる謬見なり。其理如何に玄妙なるも社會に何等の貢獻する所無くんば是れ空理のみ、經卷如何に浩瀚なるも人生に何等の資益する所無くんば一堆の故紙と何ぞ撰ばん、見よや彼の金剛石を、經僅に寸に充たずして而も世界の珍寶と稱せられ無價の貴寶と尊ばるゝも其用ふる所は如何ん。貴人富者が裝飾の具となりて金冠玉帶の上に輝き能く時俗の耳目を驚かすことはあらん。然れども少敷考ふる時は畢竟無意義たるを知るべし、彼や飢て食ふべからず、寒くして衣る可らず。社會の實用に於て毫も益するところ無きなり。佛教亦此の如く其深妙の理

宗教の宗教たる作用實に此に在りて存す

は以て學者の珍と爲すに足らん、幽邃の談は以て學説界を裝飾するに餘りあらん、然れども苟も金剛石を以て滿足せざる限りは亦是を以て甘心すべからざるは勿論なるべし、假令ひ貴人富者が賞玩の具とならざるも、廣く社會厚生の資となるに孰れ、假令ひ一部學者の稱賛を博せざるも、一般國民の同情を買ふに孰れ、宗教の宗教たる作用實に此に在りて存す、況や現今の社會は理想の社會にあらずして實行の社會なり、少なくとも漸次實行に近づきつゝある社會なり、口と舌との世にあらずして手と足との世なり、少なくとも手と足とに漸次近づきつゝある世なり、理想は少數の或る一部に限られ、實行は廣く全體の勢力なり口と舌とは言ふべく、手と足とは行ふべし、言ふべきものは誇大なるも動もすれば空論に流るゝの虞あり、行ふべきものは一小事と云へども一々實力を構成す、今の時は前者にあらずして後者にあり、故に今の時の宗教は理想的にあらずして宜敷實行的なるべきなり。

故に今の時の宗教は理想的にあらずして宜敷實行的なるべきなり

單純より複雜に、理想より實驗に、實驗より實行に推移するは社會進化の順序なるが、佛教も亦大體此順序を失はざりしが如し、熟〻大古野蠻時代の狀態を考ふるに、當時の人類は社會的組織極めて單純にして、其生活は最も簡易なるものにてありしなり、彼等野蠻人は未だ畊織の術を知らざれば畊織の艱を

知らず、山に獵し水に漁し水草を追て轉居し、天然に衣食する外多く求むる所あらず、就中多少進歩せる蠻人に在ては飢て食ひ渴して飲み、飽けば則ち退て涼風枝を渡る樹下に、彼等が爲めの第二の生命なる睡眠を貪り、覺れば則ち仰て蒼々たる天象を觀じ、恍然として神を沖虛に馳せ想を空漠に遊ばしむるを以て無上の樂とせり、日星の燦爛たる、山岳の巍峨たる、其他風雨寒暑の往來より、人間生死の代謝に至るまで、一として彼等が宗教的思想の動機とならざるは無く、悉く不思議の現象として彼等の感念に反響せざるは無し。而かも此不思議てふ感念こそ抑も宗教なるものゝ發源地にして、換言すれば宗教なる

ものは當時彼等に此不思議を説明せんが爲めに起りし高尚なる自家心性の一現象に外ならざるなり其一證としては宗教の通有性とも稱すべき天堂地獄を説く事に於て、其多少厭世趣味を含蓄せざること無きに於て、世界の宗教が殆ど相一致せるにても知らるゝなり。殊に古代人種中想像の豐富を以て第一と稱せらるゝ印度人の間に起りし宗教（佛教以前の宗教なり）が、空理を談ずる事の多くして天を説明することの詳なるは怪しむに足らず。然るに佛教起りて古來の宗教が動もすれば、空理に偏ずるの弊を看破し、之を矯正せんと欲して、空理の外大に實行を教へんと試みたるも、奈何んせん古來慣習の一朝にして改むべからざ

一實大乘の妙旨。佛教本來の面目

る、風土人情の一概に強ふべからざるものあるとの爲め、全く空理を排すること能はず、是を以て彼等も信じて涅槃なりと寂滅なりと思惟する極めて卑近なる空（外道の唱ふる空にして小乘の灰身滅智とは亦自ら同じからざれども若し大乘の意より云ふ時は小乘も偏空を免れず）を導ひて、漸次高尚なる空（大乘の眞空なり）に誘ひ、結局空の至極は實（妙有なり）と不二なるの眞理を示し、更に一歩を進めて小乘をも併せて呵斥するに至れり、之を一實大乘の妙旨と爲し之を佛教本來の面目と爲す。

此の如く元來佛教の本領は最初より、彼（空）にあらずして是（實）にありと云へども、佛當時の說法に於ては尙古來の傳說想像を取りて其儘依用せしもの尠なからず、之を是れ察せずして後世の佛教徒が兎角理想の

其罪佛教にあらずして全く佛教徒にあり

一方に偏して、實行に力を用ふることの用意を缺ぎたるは、抑も佛教が社會の地盤と一歩相距るの端緒を開きたるものにして、其罪佛教にあらずして全く佛教徒に在り。

本邦佛教の開祖とも稱すべき聖德皇太子が、興隆三寶の傍四箇院を開きて四衆を賑恤し、池を鑿ち溝を通じ、孜々として厚生利養の道を盡したる、道昭、行基、傳教、弘法、慈覺、榮西の古德が、山野を跋渉し原野を開墾して、水利を疏し橋梁を架する等、汲々として國家社會の經營に勉めたるが如き、看來れば何れか是れ佛教本來の面目を發揮し、以て社會の要素と爲さんとし、若しくば爲したるものにあら

ざる。宜哉當時の佛教が今日に比すれば百事草創の際にも拘はらず、殆ど旭日曈々の勢を以て、一朝能く社會の大勢力となりしや。翻て近古の佛教が如何なる狀態なりしかを觀よ、二百年來幕府保護の政策は、十萬の僧徒を腐敗せしめ佛教の精神本領は大半沒了せり、此の時に當て佛教が啻に社會の要素たらざるのみならず、却て無用の長物たらんとせり、幕府の末造佛教の勢力が蕩然地を拂ふに至りしは、寧ろ其處にあらずとせんや。明治維新大勢茲に一變して文明の新紀元を開き、社會は殆ど奔馬の勢いを以て長足の進歩を爲せしに反し、佛教は常に其影を望んで後に墮若たりし、否呆然として爲すところを知らざる

尚啻に汽車と汽船と電信と電話との差のみにあらざるなり

の有樣なりしなり。近來少敎警醒する所あるが如しと云へども、之を社會の進歩に比すれば、尚啻に汽車と汽船と電信と電話との差のみにあらざるなり。若し今日のまゝにして何等か救濟の道を講ずる無からんか、追從は扨置き其社會との距離は正に千萬里ならんとす。然ば則ち佛教今日の衰退は政府施政の失にもあらず、學者の咎にもあらず、泰西文明の影響にも、固より外教侵入の故にもあらざるなり、假令一分是等の爲めよりとするも其は眞に一分なり、他は皆佛教徒が自ら招き過にして、其實は佛教が社會の無用物となりし當然の結果なり、因果應報の理顯然たり、優勝劣敗の數爭ふべからず。

如何なる難治の症と云へども深く病源を窮むるに於ては、藥を投ずること必しも難事にあらざる如く、佛教衰退の原因寔に此に在りとすれば、之が救濟の道亦須く此に於て力を用ひざるべからず。近來此點に付て世の佛教徒が稍覺るところあるが如きは甚だ喜ぶべきの至りと云へども、幕府以來の惰力は容易に改まらずして、佛教全體より云へば今尚嘈乎として六朝の繁華を夢るの徒多きは憐れむべし、其中幾分進歩的の思想を有すと稱し、多少社會の囑望を負ふ佛教徒にして其行動如何ん、此輩尚宗教獨立の大義を誤り、自ら進んで社會の勢力たること能はず、却て社會の或る勢力に依賴して、僅に自家の勢力を

夫れ勢力は養成すべく製造すべからず

製造せんと試むるに過ぎず、何ぞ其れ陋なるや、夫れ勢力は養成すべく製造すべからず、製造せる勢力は人爲的なり、一時的なり、一旦幸にして得るあるも又忽にして消滅す、之に反して養成せる勢力は永久的なり、實體的なり、一朝にして得られざる代り亦一朝にてし失ふべからず、佛教徒たるもの宜敷勢力養成の策を講ずべきなり。謹んで案ずるに我宗祖大師、聖道蔚興の秋に當りて神を母胎に降し、弱冠にして早く佛教界の弊處を看破し、巧みに一乘の妙旨を發展して、明に二諦の法幢を樹て、空理を排して實行を勸め、仁義を貴び王法を重じ、資生産業を奬勵して報恩の大行に擬し、

捨家棄慾を表せず持戒精進を用ひず、毫釐も社會人道を廢せずして現當二世を饒益する眞宗を開闢し玉へり。大師の本意は蓋し從來の佛教聖道諸宗が空理の一方に偏して徒に玄に誇り妙を說て僅に一部人士の信仰を博するか、然らざれば禁厭巫咒の猾手段を弄して愚人を蠱惑する外、實際社會人類に何等の資益無く、漸く世間と隔離して、其極到頭自ら滅亡に歸する外無からんとするを視て、大悲矜哀の情勃然として禁ずる能はず、焚るが如き熱心は一身の譏譽を顧るに遑あらず、驚天動地の大英斷を以て、總て佛教中人類の進歩と社會の組織とに妨げある一切の規律制度を擧げて悉く之を廢毀し、直に社會人類を對手

とせる實行的宗義を開闢弘通し玉へり。大師が此英斷は佛教有て以來の大革命にして未曾有の變化なれども、實は周圍の裝飾を剝脫し、殆ど裸體的に佛教本來の面目を顯示せるものなり。第八祖の大師之を承けて一層此意を擴充し、國豐民安の佛意を宣揚し、最も力を王法爲本に盡せしかば、宗風一時に勃興して都鄙を風靡し、爾來滴々相承し二諦双資を以て一宗の骨目とするに至れり。

夫れ社會は國家の成素にして、蚩々たる氓は社會の單位なれば、國家を經營せんと欲せば社會を統理せざるべからず、社會を統理せんと欲せば是非共斯氓を對手と爲さゞるべからず、是れ宗祖大師が一部上流

人士よりも、寧ろ社會の下層たる一般國民を對手に撰びたる所以なり。

今や文明の風潮は滔々として底止するところを知らず、社會は複雜に複雜を重ねて、人類の生活は非常に困難なるに至り、錙銖の利も人々爭ふて之を得んとし、日夜蹐蹐として衣食に忙殺せられんとするの今日、其れ復何の暇ありてか悠々として思想を空漠に馳せ、工夫を感念の坐に凝すを得んや。故に今日は如何なる高妙の理論も、社會の實益に資する無きの理論は決して行はるべからず、之に反して縱令理論に於て不十分なるも、實行に於て缺ぐるところ無くんば、社會は必ず之を歡迎すべし、何となれば實

理論の不足は實行之を補ふべし實行の不足は理論を以て爭ふべからず

行は必要にして、必要は何物も之を拒否することと能はざればなり。

理論の不足は實行之を補ふべし、實行の不足は理論を以て爭ふべからず。故に今日の宗教家は口舌の敏ならざるを憂へず、手足の動かざるを憂へよ、未來の禍福を說く前に先づ現在の利益を說け、能く此覺悟あるものにして初めて與に宗教を語るべきのみ、更に一歩を轉じて論ぜんに、今日は一層切に佛教が適當なる宗教的動作の範圍內に於て國家社會の爲め貢獻する所無かるべからざる一の理由を有す、其は他にあらず東洋目下の形勢是れなり。現に清國は方に五千年以上世界に價値ある名譽の歷史と、八十五

萬餘方里天府の沃土と、四億餘萬勤勉の國民とを擧げて、歐洲二三列强が鴟梟飽く無きの慾に供せんとせり

東洋目下の形勢に付ては少數云ふところ無るべからず抑も清國は露西亞を除き世界第一の版圖を有する一大帝國にして亞細亞洲の東部に位し北緯十八度より起りて南緯五十度に至り東經七十三度より西經百三十四度に達す其面積八十五萬三千四百餘方里にして歐羅巴全洲の一倍强に相當し人口四億一千六百餘萬を有して全世界人口の始ど四分の一强に當る而して其疆域は東北烏蘇里、黑龍の二大江水を帶して露と相接し北

西は興安、阿爾泰の大山脈に據りて西伯利亞の西南部諸州に連り西は葱嶺、天山を境して土耳機斯坦と隣り北馬拉亞の大山脈は西南に走りて印度諸國との間を横斷し東南面は海に瀕し鴨綠江を隔て朝鮮と接す形勝の雄大にして土壤の沃腴なる寔に東亞の大曠原にして、天下必爭の地なり左に歐洲强國が現今清國に對する勢力分配の一班を述べん

清國が世界列國に對する總ての關係をして今日の如く急轉直下の峻境に驅りたるは明治二十七八年の日清戰爭與て力あり清國が他の海外諸國と通商貿易を開きたるは北京條約以來殆ど四十

年に垂んとし全國の沿岸に現在三十餘箇所の開港地を見るに至れり今や歐洲各國は進んで通商以外更に勢力分配の目的を達せんとして熱中するものゝ如し

一　露國　日清戰爭終局の結果として清國が軍費賠償金四億萬フランクの公債を海外に募集せんとするや奇貨措くべしとして第一に手を出したるは露國なり露國は先の大藏大臣ウィテーをして清國に勸告せしめ四朱の低利を以て其募集に應ずる旨を約し遂に稅關の收入と露政府の保證とを擔保とし佛露兩國銀行をして無事に其公債を引受けしめたり(一千八百九十五年六月十九日)

露は之が報酬を名として一面には其翌年露清銀行設立の許可を得て清國の財政に將來大勢力を得べき基礎を作り同時に同年十一月東大鐵路公司設立の許可を得之に依りて西伯利亞鐵道をして滿州を貫通せしむる目的を達するを得たり而して昨年に至り日本に對する防禦策なりとの口實を以て大連旅順の二要港を借得て此二港に滿州鐵道を連絡するの許可を得て露が宿望たる西伯利亞鐵道南下の計畫と東亞に不凍港を得んとの希望を達したるが露が清國に於ける勢力範圍の擴張は此に止まらず蒙古及トルキスタン迄も今は共に露の勢力區域の中に打算せられ正定よ

り大原に通ずる山西省の中央鐵道漢口より北京に至る內地橫斷鐵道をも今日は皆其掌中に收むるに至れり

一　英國　英國は北支那に在ては露が南下の防遏として一は威海衛を租借し以て旅順大連に備へ一は牛莊山海關北京間の鐵道は香港上海銀行の管理に歸し以て西伯利亞鐵道南下の防禦策を立てたり中央に於ては滔々たる楊子江流域一帶の地を其の勢力範圍內なりと聲言して淸政府をして其不割讓を宣言せしめ(一千八百九十八年二月十四日)而して鐵道政畧に依りて其勢力を確保せんとせり便ち(一)上海より南京を經て河南の信陽府に到る線(二)上海より蘇州杭州を經て寧波に到る線(三)鎭口より山東に到る線(四)山西より晉陽に到る線等にして是等の四線は大抵怡和洋行及上海香港銀行の管理に屬せり更に南部に於ける英の計畫を見んか雲南兩廣に在ては佛國と勢力を競ひ雲南に在ては西は緬甸よりラングーン線を延長し東は西江を利用して流に沿ふて雲南府との連絡を取らんとし廣西に在りては西江一帶の流域を劃りて自家の籠中に收めんとし第一着に既にウーハウに至る迄の通航權を得(一千八百九十六年)又漢口廣東線(怡和洋行、上海銀行、及米國のケヤイナゲフロメントコンパニーとの共同

計畫に係るもの)は英が江西、湖北、廣東の三省に其勢力を扶植するものにして南清に於て計畫せられたる將來縱横の鐵道は悉く是れ英國が勢力の發展線にして英の勢力は該鐵路の延長と共に延長し同時に清國の主權は年一年縮少を免れざるなり

三　佛國　佛國は一千八百六十二年にカムボヂヤを略取し八十四年安南を保護國とし九十五年にコーチヤイナ及メコン河の上流左岸の地を取り終に東京安南地方に八十萬方里の領地を有するに至り漸次勢力を雲南兩廣に延ばさんと努め一千八百九十八年清政府に迫つて同地方の不割

讓を宣言せしめ一方に於ては河内ハンヤラ線を延長して雲南府と連絡せんとし兩廣に對しては河内、龍州、南寧線を北海に延長し廣州灣租借により是等の勢力を確立せんとせり

一　獨國　獨國が膠州灣に注目せしは蓋し一朝一夕の事にあらざるが如し今を距る三十年前宰相ビスマルクはリヒトフオヘン氏をして遍く清國の沿岸を跋渉して形勝の地を調査せしめしに此時氏は已に膠州灣占領の必要を復命せりと云へり而して一方に露國が同灣を窺ふの形ち漸く現はれんとするを見て獨は暫しも猶豫せず恰も一千八百九十七年山東省に於て、宣教師殺害事件の

清國は清國の清國にあらずして列强の清國なり

起るや好機逸すべからずと爲し直に東洋艦隊を派し同灣を占領し翌年三月七日を以て同灣の借得と併せて山東の鑛山採掘權、山東鐵道布設權を得たり

要ずるに大勢既に此の如し、清國は最早や清國の清國にあらずして歐洲列强の清國なり。所謂勢力平均の事情の下に、列强が互に嫉妬猜忌して相牽掣する間に、僅に奄々の氣息を保つと云へども、此等の事情は到底永久相續するものにあらざるのみならず、近來の形勢より視るときは、東亞大陸の風雨針は常に低氣壓を示せり、不測の變眞に朝夕を計られざるものあり、警報一度傳ふるの日は、恐くは尨然

たる此の老大國が、其四億萬の人口と、八十五萬餘方里の大陸と、五千年の歷史とを擧げて、名實共に滅亡に歸するの秋ならずんばあらず。嗟呼清國の滅亡、我邦は何等の影響を蒙ることなしに獨り晏然として始終傍觀の地に立つを得べけんか。

佛生國として我國の佛教徒が夢寐の間にも忘るゝこと能はざる西天五印の地が、一朝英國の有に歸し、亡國の志士をして沍河の流と共に、萬古不盡の怨を呑ましめてより今に百餘年を經たり、カンボヂヤ、安南、緬甸の諸王國前後相次で滅亡に就き、其他土耳古、暹羅、朝鮮、支那或は獨立國たり或は半獨立國たりと云へども、其實は皆半滅亡の悲境に瀕するも

のにして、觀來れば茫々たる東洋大陸に在りて、純粹に名實共に獨立國の面目を完全に保有するは獨り我日本帝國あるのみ。我の責任此に至りて亦重且大ならずや。而して我國佛教徒の特に注意すべき點は、此の如く頻々滅亡に就て諸國は大概佛教國にして其民は多く佛教徒なり、之に反して其征服者即ち其勝利者は、悉く耶蘇教國にして其民は皆耶蘇教徒なる事是なり。

所謂支那分割なる問題も、早晩事實に於て解釋せらるべき問題なりや否は暫く措き、東亞の形勢寔に此の如しとすれば、一面に於ては我邦も自衛の必要上庶幾は補翼の一端となり、一面に於ては若能ふべく

清國布教は我佛教徒の急務にして且其責任なり

んば、目下萎靡頽廢の極に達せる清國の佛教徒を鞭韃して大に彼徒の警醒を促し、セメテ幾分なりとも佛教が國家社會の一要素たるべき本來の面目を了解せしむることを得ば、何ぞ必しも今日の清國に取りて、尚能く一滴靈藥の功無しとせんや。是等の理由あるによりて清國布教は我佛教徒の急務にして且其責任なり、清國は啻に我と同文同種なるのみならず實に同一宗教を奉ずるの國なれば、彼國の佛教今日とそ衰退を極めたれ、以前唐宋元明の時代に當りては國運の隆盛と共に如何に其盛大を窮極せしが、大慈恩寺の宏壯は以て祇園精舍の輪奐に比ずべく、天台山の靈場は以て耆闍崛山と幷べ稱ずべし、凡そ翻經

の盛堂塔の大、三藏講說の完備せる、諸宗勃興して蘭菊芳を競ふの美に至りては、五印の盛時と云へども或は遠く及ばざりしなり。而して我邦の佛教は正しく朝鮮より傳來せりと云へども、其は唯佛像經卷と慧灌、曇徵、惠慈、惠隱等四五の僧徒を渡來せしめしに過ぎず、時機の未だ熟せざりしが爲とは云へ、是等の僧徒が我邦最初の佛教史に貢獻したる部分は僅に數頁を埋むるに過ぎず、其大部分は傳教、弘法、慈覺、智證等我邦の諸大師と、少しく下りて道昭、榮西等の諸德とに依て塡充せられたり。而も傳教以下の數者は何れも唐宋の盛世に當りて彼國に渡航し、洛陽、長安（今の陝西省西安府は唐の長安の故都なり）の帝都に留學して、求

喇嘛教

法の傍彼國の制度文物を視察し、資て以て本邦の文化を助けしもの尠なからず、我國往古の文化が佛教に負ふもの多きは是が爲めなり。之を要するに印度は支那佛教の母國にして、支那は又た我邦佛教の母國なり。然るに清朝建て以來喇嘛の一教漸く盛に、清廷は政畧上從來の佛教を抑壓して喇嘛教を保護し、加ふるに佛教徒の意氣精神全く腐敗したるの結果、左しも盛大を極めし彼國の佛教も此に於て漸く衰退し、現今に至りて愈々蕩然たりと云へども、然れども彼國の佛教は未だ全く滅亡したるに非ず。國內到る處宏大なる佛寺堂塔の、前朝の偉觀を留めて今に現存するものあり、其僧徒は、無學無識にして、社會無用、

枯木再び春を回し死灰再び暖を吹くことを決して無しとは云ふべからず

の長物なるにもせよ、彼等は尚口能く經文を誦し、手能く佛像を模拜することを忘れざるなり。之を譬ふるに清國現時の佛教は、恰も枯木死灰の如く一點の生氣をも止めざる如しと云へども、若し何等かの手段によりて幸に一團の活火を點ずるを得んか、枯木再び春を回し死灰再び暖を吹くことを決して無しと云ふべからず、否實は其機會を俟つものなり、機會さへ來らば何時にても勃然再興の氣運は陰然伏在せるなり。然らば則深く內地を跋涉して前朝の遺墟を吊ひ、古今盛衰の跡を訪ふて、窃かに將來復興の策を畫する等是將た我邦佛教徒の責任にあらずと云ふべけんや。數年前よりして清國布教の聲漸く我佛教徒間に傳ふ

るに至りしは、一は東洋の形勢大に切迫し來りて、社會國民の耳目が自然彼國に集注するに至りし影響と、一は佛教自ら多年の醉夢少しく覺めたるとに因るものにして、兎にも角にも此現象は、佛教に取りても國家社會に取りても甚だ喜ぶべき現象と云はざるべからず。東洋の形勢此の如く國家是れより倍々多事ならんとし、人々三面六臂あるも尚不足を感ぜんとする秋に當りて依然舊態に安じ、我は佛教者なり一切世間に關係すべからずと稱して高昂自ら持し、然らざれば徒に世間の名利に汨沒して宗教徒にあるまじき陋態を演じて恥ぢざらんとし、或は多少時勢に通ずと稱する徒の、動もすれば輕舉妄動俗間の政

國家は到底此の無用の長物を存留するの義務を有せざるなり

黨者流と結托して事を爲さんとする如き、凡そ今日佛教徒の爲す所此の如しとすれば、社會は之に對して到底愛想をつかさゞるを得ず、國家は到底此の無用の長物を存留するの義務を有せざるなり。

今日は是れ世の佛教徒が非常の決心と非常の奮發とを以て、少なくとも佛教をして社會の一要素、即ち國家の半面に結合せしめて離るべからざる一個の勢力と爲すに非ざるよりは、如何に舌を爛し聲を枯して辯護に勉むるも到頭滅亡を免れざるの秋なり。佛教徒或は云はん、今日は社會の秩序整頓し、百事其緒に就きたれば、昔時の如く佛教徒の手を下すべき餘地無しと、是れ大なる謬解を云ふべし、人文發達

して社會が進歩すれば進歩するだけ、他の半面に漸々一種の空虛を生ずるに至るは、古今人類歴史の證明する所なり。而して此の空虛こそ由來國家が其塡充を宗教家に待つ所のものにして、佛教徒が今後全力を盡すべき適當の方面と事業とは、實に此間に存する事を知らざるべからず。元來社會なるものは一の彈力性を有し、外面に膨脹するに隨て内部に空間を生じ、人類生活の競爭激烈なる程、社會の德性次第に退歩せんとするは、蓋し勢ひの止むべからざるものなり。而も國家は常に外面の膨脹に忙殺せられて之を救ふに遑あらず、是れ宗教家の大に乘ずべき機會にして、宗教なるものが文明世界に缺くべからざ

る所以なり。是等は佛教が對他の義務と云はんより、寧ろ佛教自家の本領にして殊に我眞宗二諦の教義に於ける眼目なり。佛教をして社會の要素と爲し國家の勢力と爲すの道此を措て他に求むべからず。

今回新門主猊下の清國御巡遊の御趣意が果して那邊に在るかは、最早や此上多くを說くの必要なかるべし、

猊下昨年一月十九日を以て神戸港を解纜し、五月三日を以て御歸山あり、此間六箇月を經一百餘日を費せり。到る處上海、香港、廣東、武昌、漢口より北京、長城に及び、道程數千里足跡殆ど禹城に遍し、或は廢寺を榛莽の墟に吊ひ、或は荒院を孤驛の中に訪ひ、以て古今盛衰の跡を察し、長江に浮んで

歸する所は護國扶宗二諦双資の宗憲を恪遵し本願一實の大道をして萬古に炳焉たらしめんとするに在るのみ

は山河の固め德に在て險に在らざることを想ひ、長城に踞しては萬古の胸臆を開拓して天地に俯仰するの慨あり。凡そ巡遊中猊下の身心に感觸せし所のもの一端にあらずと云へども。歸する所は護國扶宗、二諦双資の宗憲を恪遵し本願一實の大道をして萬古に炳焉たらしめんとするに在るのみ。世間若し猊下が此擧を得て尋常觀光の遊と爲すものあらば、其人や未だ與に語るに足らざるなり。

第二章

御發途……神戸より漢口迄

新門主猊下今回の御巡遊たる、固より尋常觀光の遊にあらず、時勢の必要止むべからざるものあるに由れり、其理由大畧序論に於て述ぶるが如し、護法扶宗の爲めに不惜身命は佛家の常談なりと云へども、然れども實際に付て之を見んか、身一派嗣法の重任に居り、生れて華冑の富貴を受け給ふ、之をして若し世間普通の貴公子たらしめば、紈袴に慣れ柔惰に耽り、曾て艱難の何物たるを知らざるべきなり、然るに責任の歸するところ東導西化席暖なるに暇あら

ず、今や遠く錫を異域の月に掛けんとす、往來の便、舟車の利、復昔日の比にあらずと云へども、此擧が一に大法護持の上に於て、止むべからざる一片の精神より出たるものなるに至りては、跡を古へ入唐求法の諸德に齊ふするものにして、實に佛教社會近時の一盛擧と謂はざるべからず。

此の如くして　猊下御渡清の事一度決するや、本山内事に於ては專ら之が準備に忙がはしく、此間猊下には御教用と一半諸事準備との爲め、三十一年十二月押つまりて御東上あり、築地別院に御越年の上昨三十二年一月上旬御歸山あり、次で本山は同月十日甲第一號を以て左の如く門末一般に達示せらる

達示

甲第一號　　末寺一般

新御門跡不日御發途清國へ御巡遊相成る

明治三十二年一月十日

執行長　梅上澤融

此達示の公表せらるゝや、遠國邊鄙の門末は初めて今回の事あるを知り、一は其御盛擧を稱賛し奉りて隨喜措かざると同時に、一は清國と云へば僅に一葦水を隔つる隣國にして、殊に我邦佛教の母國なり、往古に在りては、彼我の往來常に絶へず修好最も厚かりしが、今日は事情一變して、我の嘱々として文明に向ふに反し彼は依然舊態を脱する能はず。其國は未開野蠻として永く文明國の伍伴より擯斥せられ其民は頑冥不靈を以て世界到る處に拒絶せられんとす。加るに髮匪の亂以來、内地は甚敗荒廢し、比年黄河の氾濫は、數百萬の生民をして饑餓の慘境に彷徨せしめ、之が爲め一般の人氣非常に惡く、草賊群を爲して往々行旅を刼かす者あり、猊下が千金易へ難きの身を挺して、眇然此間に投ぜんとするを聞て、は其事の頗る危險なるを思ひ、且は風土氣候の健康を損する事無からん事を氣遣ひ、無事の御歸朝を希はざるは無かりき。一月十九日　猊下は雲霞の如き奉送者に送られ給ひ午後三時二十七分の汽車にて七

一月十九日七條停車場御出發

御便乘の佛國郵船ラオス號

條停車場を御出發あらせられ、同六時神戸着、豫て御旅館と定めたる海岸通三丁目後藤方に御入あり。

此日　猊下を停車場に見送らんとて、一山の役員は固り大學林、文學寮、其他諸講中を初め、遠近より集り來れる緇素場の内外に充滿し、一同肅然として奉送し重なる人々は神戸まで至りしも多かりき　猊下が御便乘ある可き汽船は、佛國郵船ラオス號と稱し横濱、神戸、長崎、上海、香港間の定期航海船にして四千餘噸の大船なり。船體構造の堅固なる、室内裝飾の善盡し美盡せる、其他諸事整頓し、乘客をして些の遺憾を感ぜざらしむる等は、流石に佛國郵船の外見るべからず。ラオス號は同夜十二時拔錨の

人々は頓て辭し去りぬ

船は徐々に動き初めぬ

筈なれば　猊下は八時旅館を出でさせられ、東の棧橋より御乘込みあり、船中まで奉送せる人々と暫時御談話ありて後、人々は頓て辭し去りぬ、而して船は徐々に動き初めぬ、時に午後十二時。此夜一天雲無く、月明に星稀に、海風徐ろに銀波を揚げて風光畫の如し。遙に陸上を見れば六甲、摩耶の諸山夜色糢糊の中に屹立して、恰も巨人の默して一行の壯遊を送るものに似たり。

猊下今回の御巡遊に隨行を命ぜられたるは左の數名なりとす

教學參議部總裁　武田篤初

奉仕局用係　朝倉明宣

参議部錄事　本田惠隆
奉仕局雇　永池三章
同　中島裁之
同　市川達讓
從僕二名

此外連枝藤枝澤通師は見送りとして上海まで、香川默識は清國浙江省杭州府布教駐在として共に同地まで隨伴せり。

一月二十日　神戸港の埠頭を離れたるラオス號は、須摩明石を夢裏に過ぎ、曉烟一帶藝備の諸山を右舷に見て、明媚の風光畫の如き瀨戸内を馳せ、三十六灘早く既に行き盡くして、午後四時馬關海峽を通過し玄海洋に向ふ。

聞く此日海峽附近長門豐前の門末僧侶は、馬關門司の海岸埠頭に出で、御乘船の通過を迎へて、遙に奉送の意を表したるもの多かりしと

船玄海洋に出るや船體少しく震動を感じ、夜に入るに及んで波浪漸く高く、船の動搖稍甚し。

二十一日　午前三時、前方遙に赤色の燈明臺を認め、船の既に長崎港に近けるを知る。然れども夜尚深きを以て、暫く港外に在て黎明を俟ち、午前六時進んで港内に入り、海岸を距る十數丁の處に投錨す。暫くありて一隻の小蒸汽船、船首に樹たる一旒の旗を朝風に翻へし、盛に黑烟を噴きつゝ此方を指して馳

せ來るあり、後に續て一艘の和船、同敷此方に向て漕ぎ來る、近づくまゝ見れば何れも僧俗を滿載せり、是れなん長崎市の門末信徒が猊下を奉迎せん爲めに來れるなり。長崎教區教務所員、總代會衆、監獄教誨師、組長を初めとして、同地の紳士紳商數十百名乘込めり。猊下は甲板に出で一同を引見し、其懇請を容れて暫時御上陸あるべきに決し、迎の小蒸汽に乘移りて棧橋に着し、陸上雲霞の如き奉迎人の中を御通過ありて、豫て休憩所と定めたる元後藤町肥塚與三郎方に御入りあり。道筋兩側には數千の群集堵を爲し、同地佛教青年會は喇喨たる道樂を奏して先導を爲せり、時に午前八時。

肥塚氏は土地の豪商にして酒造を業とし篤實なる本派の信徒なり。

休憩所に於ては法中信徒幷に肥塚の家族に御對面あり、十一時晝餐を喫し、少時休憩の後十二時再び御乘船、門末の奉送等總て前に同じ。

午後一時、船は錨を拔き港外に向て進む。此日天氣晴朗なりしも陸を離るゝに隨ふて風波少敷加はり、船體の動搖は機關の震響と共に終日絶へず。午後四時過ぎの頃五島の沖を通過し、是れより全く日本の地を離れて船は水天淼渺の間を指して支那海に入る。

二十二日　前日より海上を馳すること二十四時間、午前十一時左舷に馬鞍島を認む、而して海水漸く混

を帶び船の既に楊子江口に近けるを知る

濁を帶び、船の既に楊子江口に近けるを知る。午後三時江口に達す、依て進行を止め、水先案内の來るを待て船を進めんとするに、遇〻干潮に際し、洲淺くして進むべからず、止む無く潮の來るを待て六時に至る。武田無堂詩あり（無堂は篤初の號なり）

風翻濁浪日將淪　極目東南無際垠
孤枕屢驚異鄉夢　客衣仍帶故園塵
長江寂莫春猶淺　遠樹微茫趣轉新
大船投錨待潮至　崇明嶋外月如銀

既にして海潮至り船再び進行す、大江を遡ること四十八海里にして午後九時吳淞に達す。此處より上海まで尚殆ど二時間の舟行を要するを以て　猊下は明

初めて大陸月夜の光景を稱す

上海上陸

香港に向ふ

朝御上陸あるべく、一夜を船中に明し給ふ。一行甲板に出で、初めて大陸月夜の光景を賞す。

二十三日　午前九時佛國郵船會社附屬の小蒸汽黃浦號來る、一行之に乘じて黃浦江を遡ること十三海里にして、十二時前上海埠頭に着す。大谷派同地別院輪番佐野即悟、本派門徒吉田某（大阪の商人）等の出迎へるあり。猊下は直に御上陸ありて、佛租界デ、コロニーホテルに投ず。午後二臺の馬車を僦ひ、一行之に乘じて居留地を巡廻し、公園其他各處を巡覽す、此夜前記の佐野外二三の訪問者あり。

二十四日　今朝此地を去て香港に向ふ豫定なるを以て、午前六時晨起行李を整頓し、七時ホテルを出で、

再び黄浦號に乘じて江を下り、一時間餘にして吳淞に達し、八時四十分佛國郵船インダス號に乘船す。インダス號はラオス號の姉妹船にして、其結構裝飾の完美せるは毫も前者と異らず。既にして九時十五分となるや、船は錨を拔き徐々進行を始む、藤枝師と香川とは此處にて、猶下に別を告げ、共に上海に引返し、師は二十六日皈朝の途に上り、香川は獨り杭州に向て出發せり。

上海は清國江蘇省松江府上海縣に在り、北緯三十一度十五分、東經百二十一度二十九分に位す。我國長崎港より楊子江口まで三百五十海里、江口より吳淞まで四十八海里、吳淞より左折して

更に黄浦江を遡ること十三海里にして上海埠頭に達す（黄浦江一名申江春秋戰國の時楚の春申君の開鑿する所なり）蘇州江と浦江との會流點にあり、地勢平坦四望開豁、最も水利の便に富む、縣城は浦江の西岸に在り、周回二里餘回らすに外廓を以し、七の廓門を設けて往來を通ず。城内は街衢狹隘、加ふるに不潔汚穢にして臭氣充滿し、他邦人は殆ど足を容るに堪へず、道台、知縣の衙門は皆此中に在り。居留地は縣の城廓外、北方浦江に沿ふて一帶の地を占め、分ちて英、佛、米の三租界と爲す、英租界は南洋涇浜より北蘇州江に達し、東浦江を境とし西防禦溝に至る、廣袤一英里あり、東西に

通じて六條の大街を開き平坦砥の如し、之を北京路、南京路(又太馬路)九江路(又二馬路)漢口路(又三馬路)福建路(又四馬路)廣東路(又五馬路)と號す、就中太馬路、四馬路最も繁華の地なり。南北の大街亦六、日く四川路、廣西路、河南路、福建路、浙江路、江西路、其間大小巷衢縱横に通じ、區劃整然として二層三層より四層五層に至る洋館軒を駢べ、車馬の往來織るが如し。英租界に次で殷賑なるを佛租界とす、米租界又之に次ぐ、佛租界は縣城廓と英租界との中間に在り、東西の大街を法公館馬路と云ふ、南北に通ずる六條の大街は、洋涇浜の大橋を架して英租界に通ず、

廣業洋行を初め二三の日本商店あり。米租界は蘇江の北岸に沿ひ浦江に臨む、市街稍々斜行するものあり、英佛の如く整然たらず

人口 此地の人口は日清戰役以前は、大約六十餘萬多きも七十萬を超へざりしが、戰役の開初となるや清人の生命財産を保安せん爲め、此地に避難するもの日に多く、遂に留つて永住するに至り、今は無慮百萬と號するも、實際は是れより遙に多かるべしと云ふ。

港灣 黄浦江を蘇州との會流點を以て港とす、港内廣濶にして水深く、三四千噸の汽船は直に棧橋に横着すべし。大船の出入碇泊するもの常

に數十艘、小蒸汽船支那船に至りては其幾百千なるを知らず、帆檣林立煤烟空を覆ひ、百貨輻湊して眞に東洋第一の貿易場たり。日本領事館は米租界黄浦江の北岸にあり、郵船會社上海支店、正金銀行出張所、三井物産會社支店、日清公司、上海商品陳列所、其他岸田の樂善堂、小泉洋行等一個人の商店も多く此邊に散在せり。東和洋行、日清洋行、常盤舍、熊本屋等は日本人宿泊の重なる旅舍なり。

新聞 此地には洋字新聞六と漢字新聞三あり、何れも相應の讀者を有し、多少の利益を收めつゝ營業せり。

歴史 西暦一千八百四十二年(道光二十二年我天保十四年)所謂南京條約によりて上海を開き貿易港とす此地の初めて歐洲人に知られたるは彼の廣東に於ける東印度商社廢絶の後に在り商社員はミルトン、リンドセイなる者軍艦に乘じて此地に來り英國との通商貿易を乞ふ百方要求の後辛ふじて道臺の准許を得絹布數百弗を買ふ之を上海に於ける外國貿易の嚆矢と爲す。其後數年を經るも清國通商を許可せざるのみならず倍々外人を虐待するの擧動あり是に於て千八百四十二年英國政府征清軍を發し軍艦數隻を以て先づ廣東の海岸を攻擊して福州厦門の砲臺を陷落し定海地方を占領し鎮海寧波乍浦を攻め勢に乘じて遂に吳淞を取り更に進で鎮江を畧取す清廷是に於て初て狼狽し俄に使臣を南京に派し英人と會して和議を整へ假條約を訂結す南京條約是れなり時に清の道光二十二年にして我天保十四年なり

翌年租界(居留地)を定めて貿易を開始す、其後佛國米國相次で租界を定む。是より先き清國は天津條約に依りて、長江沿岸及北部各地の諸港を

開き、我日本も此時より進んで通商を爲すに至れり、是に於て從來鴉片の外尚微々として振はざりし上海は、一朝南北の要衝地となり、俄然面目を一變して今日の盛大を致すに至れり。現今此地に於ける貿易の輸出入總額は四億の上を越へ、凡そ清國全體同總額の一倍强に居ると云ふ、亦以て此地が如何に殷盛なるかを察すべし、輸入品の重なるものは金巾類、綿布類、石炭、石油、銅、鐵、鉛、綿糸類、日本昆布、同燐寸等にして輸出品の重なるは生糸、棉花、綢緞、其他諸織物、米、藥品原料等なり。以上の外工業製造等に關して記すべき事爲しと云へども之

舟山列島を過ぐ

を畧す。

インダス號は漸次南下して午後二時頃舟山列島の間を過ぎ、左舷にボンハム島の灯臺を認む、海水清くして島嶼散見し風景頗る佳なり、然れども海風の爲め樹木生ぜず島多く禿す。

此日終日快晴海風徐に吹て疊波驚かず、船鏡上を走るが如し。

廿五日　曉來天曇りて雨將に至らんとす、西北風漸く强きを加へて船體の動搖甚しく、食卓上の器具は悉く繩を以て縛し而して後食に就くを得るに至る。

午後二時臺灣海峽に入りてより風力一層加はり、萬丈の怒濤山の如く、船は一低一高して甲板の上足を

樹る能はず、乘客皆船室に退き、身を以て荷物の顚倒を防ぐものあり。然れども猊下を初め一行は、既に數日の經驗に馴れたるを以て、快談縱横意氣毫も平日に異ならず。

夜に入りて風波靜穩に歸し。一行團欒卓を圍で夜の更くるを知らず。

二十六日　早起船室を出れば天氣晴朗氣候頗る暖なるを覺ふ、船の漸く香港に近きいを知る。十時遙にワグラン島の灯臺を認む。十一時進んで島嶼の間に入る。午後一時香港に達し、港内に入りて投錨す。一行直に上陸クヰンスロードのウヰンゾルホテルに投ず。暫くあり上野領事、三井物産會社支店長長谷川某、横濱正金銀行支店長某等の來訪するあり。此夜陰曆十五日に當りて、一輪の明月高く中天に懸りて、ヴヰクトリヤの山頂を照し、蒼茫たる海色望み際無く、光景轉た凄然たり、無堂詩あり。

峯巒三千尺　島在海濤中　雲閣倚山頂
月樓通水風　繫泊無危險　賀易極盛隆
嘆息南京約　割地與他邦

二十七日　午前長谷川某來る、猊下御會談あり、午後三時より一行共に公園地其他處々を見物す。此地の公園は所謂香港ガーデンと稱して世界有名の者なり、園内の草木は諸有る地球上の植物を蒐め盡くし、一として備らざる無し、巨大なる南洋の珍卉は、美に

香港に達す

香港の公園地

ケンヲデーの銅像

して艶なる北地の奇花に雜はり、純白雪の如きあれば深紅血の如きあり、春蘭秋菊芳香衣袂を襲ふ。園の中央に噴水池あり、前面にケンヲデーの銅像を建つ（ケンヲデーは千八百七十二年より七十六年まで五年間香港の總督として此地の經營には最功績ありし人なり、銅像は公衆の寄附金より成り八十七年の頃總督たりしウヰリヤム、デボーに因て除幕式を擧行されたるものなりと云ふ）一行は園内を一巡したる後ち、セント、ジョン寺院の邊に出で、此處よりトランウエー（山上鐵道）により て一瞬の間山頂に達す、山は英皇の名に取りてヴヰクトリヤと云ふ、ヴヰクトリア街の後方に峙だち、海面を拔くこと二千呎、平坦砥の如き數條の大道は、一直線に山麓より山頂に達し、更に岐れて數條の支道となり、以て山後の村落に通ず。山上鐵道は千八

英國が世界の海王國として東洋に雄飛する所以決して遇然にあらず

百八十八年に初めて開通せるものにて、車輛は二條の銅線によりて相上下するの裝置なり、乘客は中途にて隨意乘降するを得べし。山上の家屋は近年次第に增加し、山下より層々相重なりて山頂に至り、懸崖峻壁尙三層四層の傑閣を見る。兵營あり。旅館あり。紳士豪商の別莊あり。眼を轉じて四方を顧眄すれば、全島の光景雙眸の中に攢まり、眺望絶佳なり。港内は帆檣林の如く、煤烟雲の如し、就中英國東洋艦隊パワーフル號センチユリオン號を始め、十餘隻の堅艦儼然として碇泊せるは、殊に人目を牽くの感あり。英國が世界の海王國として、東洋に雄飛する所以決して遇然にあらざるを知る。其他獨逸の軍艦

數艘あり、同國皇弟ハインリヒ親王殿下は當時恰も此地御滯在中にて、殿下の御乘艦も此中にありと、午後五時再び鐵路によりてホテルに歸る。

二十八日　天氣快晴南國の薫風徐に旅窓の塵を拂ふ。

猊下には午前武田及び隨行一名を從へ、日本領事館に上野領事を訪問せられ、長時間談話ありて種々清國の近狀を御尋ねあり。午後博物館に至る、館はシナーホールの中に在り、演技場、公會場、圖書館等一處に在り、館内には各種動物の剝製より介殼類、礦物、古錢、古代の武器等を陳列せり。館の前に噴水あり紳商ジョン、デントの寄附に成ると云ふ。此夜約あり招かれて午後七時より、長谷川支店長の晩

餐會に到る。

九龍

二十九日　猊下は上野領事の案内にて、對岸の九龍に遊ばれ、各處御見物あり。此地は一葦水を隔て近く香港の對岸に在り、千八百六十年の北京條約に依て英國の有に歸せり。其始めは僅に方四哩に過ぎざりしが、其後漸次四方に區域を擴張し、今は殆ど以前に倍せりと云ふ。道路平坦にして市街頗る整頓せり。千八百九十二年（明治二十五年）瓦斯會社の創設せられて以來、街頭悉く瓦斯燈を用ふ。印度歩兵の營所はロビンソン街に在り、外人の家屋は主として香港に對する一帶の海岸に連りて、其間には有名なる大倉庫の設けあり、東洋市場物價の標準は、常に

東洋市場物價の標準は常に此の倉庫内に於ける貨物の多寡に依りて定せる

此倉庫內に於ける貨物の集散多寡によりて定まると、以て其廣大にして勢力あるを察すべし。西北端の海中約五丁を隔てストーン、カッターと稱する一小島あり、山頂に兵營あり、火藥庫あり、何人と云へども許可なくして島に上るを得ずと云ふ。斯くて猊下は午後五時九龍より一旦御歸館ありて、更に七時より上野領事の招きに應じ、領事館內の晩餐會に赴かせらる、一行も列席せり。

三十日　上野領事來訪あり、此日終日出でず。

三十一日　午前中は多くの來訪本邦人に接し、午後行て此地に有名なる各國人の墓地を觀る、墓地は市の東端を距る約一哩の處に在り、西人は之れをハッ

幸福なる村

ピー、バーレーと呼ぶ幸福なる村の意なり。墓は教宗によりて順序正しく區劃せらる。プロテスタント、ローマンカゾリック、バーシー、猶太教徒、回々教徒等各一區を爲せり、就中プロテスタント教徒の墓最整頓せり。墓地の中央に噴水池あり、樹木繁茂し枝葉交叉して天然の綠門を爲す、兩側には花壇の設けありて、四時の花芳を絕たず。但支那人の墓は此處に在らず、マウンス、ダビスと稱する山麓に在り。總て西洋人の墓地に對する注意は日本人の比にあらず、社會風俗上の一美事と云ふべし。

二月一日　在留邦人の來訪するもの多し、猊下は應接の煩を厭はせられず、一々之に接し給ふ。

香港

二日　此日香港を發して廣東に向ふ。午前八時一行汽船漢口號に乘込む。三井物産會社より特に店員住井辰男を同行せしめて、諸般の便利を與ふ、午後三時廣東に着しヴヰクトリア、ホテルに投ず。

香港は廣東省珠江口を距る九十海里の海中に兀立する一小島なり、北緯二十二度一分、東經百十四度五分より十八分に位す、長さ十一哩、幅五六哩、周回二十七哩に過ぎず、現今全島の人口大約二十七八萬ありと云ふ。ヴヰクトリア山中央に聳へて全土耕作の餘地無く、其初めは僅に漁夫の一部落たるに過ぎざりしが、千八百四十一年(道光二十一年、我天保十三年)有名なる鴉

英人獨特の堅忍不拔の精神は能く此磽确不毛、瘴烟癘霧の蠻地を化して東洋第一の寶庫と爲したり

片の亂後英國の有に歸してより、形勢俄に一變して、蕭條たる一寒村は、今や東西兩洋貿易の中心點となるに至れり。然れども英國が此地を化して能く今日の盛大を致したる迄の苦心經營は其幾何なるを知らず、之が爲めに費したる資本は幾億の上を越へたり。要するに英人獨特の堅忍不拔の精神は能く此の磽确不毛瘴烟癘霧の蠻地を化して、東洋第一の寶庫と爲したり、其間非常の災厄に罹りし事一再に止まらず、千八百六十七年の大火にはクヰンス路プラヤー間繁華の地を燒盡し、僅に恢復せんとして又千八百七十八年に再び大火ありて、ヴヰクトリヤ街を

燒土と爲したり。其後千八百七十四年の大暴風の如きは今古未曾有の慘狀を呈し、全島家屋の過半は人命と共に空敷海中に葬られたり。次で千八百九十四年の大惡疫あり、死者日に百餘名を出すの慘害を蒙れり。斯く幾多の障害ありしにも拘はらず、剛毅なる英人は一難を經る毎に愈々其特質を發揮し、遂に現今の好果を收むるに至れり。

此地は海中の小孤島にして、海風烈き爲め草木の生長を妨げ、以前は全くの禿山なりしを、政廳が百方栽植に努めたるの功空しからず、今や樹木繁茂して四時蒼々の觀を爲せり。家屋は直に

二大貯水池

海岸より起りて、山腹五百呎の處迄層樓傑閣累々相倚り、屋上屋を架するの奇構を觀る。近年人口の次第に增加するに隨ひ土地の不足を感ずる事甚敷頻りに海面を埋立て居れり。市中飲料水はポクホルム、タイタンの二大貯水池によりて供給せらる、一は七千四百萬ガロン、他は三億九千萬ガロンの貯水は、全市民が日夕の使用に供して餘りあり。十有五の汽船會社は、常に六百七十二萬噸の汽船を備へて、西は歐洲南は濠太利東北は米國より、北支那沿岸諸港を經て朝鮮露領に及ぶ。貨物の集散雲の如く、船舶の出入林の如し、年々の貿易總額五千萬磅(五億萬)を下

六榕寺
華林寺

らずと云ふ、是れ英人が拮据經營の力に依ると云へども、一はヘンリー、ポッテンジャー氏（一八四十二年本島總督として來任せし人）が、斷然本港を開放して自由貿易港と爲せしに依る。

現時の人口二十七萬餘其二十萬は支那人なり、日本人の在留するもの三百餘名あり。

三日　一行轎子を命じて廣東市城を巡覽す、副都督府、北帝廟、關帝廟等の前を過ぎ有名なる六榕寺に至る、寺内九層の石塔は梁の大同三年僧曇鎔の造る所と云ふ、依然舊形を存するも今は守持の僧徒すら無きものゝ如し。去て華林寺に至る、四十年前の再建に掛る、境内に七重の寶塔あり、乾隆帝の建立す

る所、別に五百羅漢の像を安ず、其れより轉じて觀音山を經て五層樓に上る、市城の全景を一望中に收むべし、歸館後長谷川雄太郎外三名來訪す、長谷川は廣東同文館日本語の教授なり。同文館は主として各國の語學を青年に教授する所にして、清政府の設立せるものなり、此の外上海北京にも同種の學館あり。

廣東城下作　無堂

南海波濤萬里春　峨舸到處細諮詢
明珠珍玩不須買　先問英雄有幾人

四日　此日珠江を遡り梧州地方に向て出發するの豫定なりしも、遇〻陰曆十二月の末に迫り海賊の出沒多く、舟行危險にして現に數日前、彼地に向へる汽

船にして、此難に罹りたるものありとて、旅館の主人堅く止まらん事を請ふにより乃ち此行を止め、直に香港に歸航するに決す。

午前八時大古汽船會社の佛山號に乘込み廣東を發し、午後三時香港に着ヴィクトリアホテルに入る。

廣東は廣東省廣州府治の所在地にして、珠江の上流三十里に在り、北緯二十三度七分、東經百十三度十四分に位し、香港を距ること九十哩なり、此地は支那にありて最も早く西人と交通を開きたる處にして、遠く十世紀の頃亞剌比亞の航海者既に盛に往來せり。一千五百十九年葡萄牙人來て貿易を開始し、後百年にして和蘭人亦

來る。千六百三十七年に至り英人蘭人に代りて其商權を奪ひ、其六十四年に東印度會社の支社を置く、爾來一百五十年間貿易を繼續せしが、千八百三十四年支那政府が會社の特權を褫奪するに及び、次で鴉片の戰爭起るや、英人は第一着に此地を陷れ、一旦兵を撤せしも幾も無くして再び侵入し、進んで南京を劫掠して遂に南京條約を訂結せり。其後暴民起りて外館を焚燬したるより、英佛連合して軍を進め、四年の間廣東は連合軍の占據する所となりしが、清廷償金を出して和を講じ事平ぐるを得たり。爾來商運大に進歩し、貿易日に盛に以て今日に至れり。

市街は城壁を回らして周回六哩、人口二百五十萬と號す、日本人は僅に三十名あり。江水深くして大船巨舶を泛ぶに足る、上流は西江に接し、遠く廣西各地に通ず、五嶺以南の大都會なり、街路は城の内外に在り、石を甃み幅僅に六七尺往來雜沓を極む、河上には支那船の常に碇繫せるもの其數六七千艘、市民の三分一は船を家として河上に住居せり。

外人の居留地は府城の南端沙基に在り。土人呼んで鬼基と云ふ外人を蕃鬼佬と呼ぶに由れり。珠江の南岸を白鷺潭と稱す、上海往來の汽船外國軍艦の繫泊所なり、北岸に稅關あり洋人三十

名を雇使す。

氣候は夏時は華氏七十八九度より百度の間を昇降し、冬期は四十四五度より七十度の間を上下す。一般の風俗慓悍にして亂を好み、無賴の惡徒群を爲して往々良民を害するに至る。

九龍の懇親會

五日　對岸の九龍に於て在留日本人の懇親會あり、午後一時　猊下には一行と共に之に臨み運動會を觀る、日本人倶樂部設立の擧を賛して金若干を寄贈せらる、元來同倶樂部は上野領事等の有志者が、久敷以前より專ら企畫せし處なるも、未だ設立の運びに至らざりしが、今回　猊下の御滯在を機として、愈々設立する事となりたるなり。

監獄署

六日　杉山書記生の案内にて此地の監獄署を視る、建築宏壯にして百事整頓せり、構内を外國人監房、支那人監房、女監房の三區に分ち、秩序整然たり、殊に其分房制の如き他の監獄の模範とする所にして東洋無比と稱せらる。

香港出發再び上海に向ふ

七日　明日出發上海に向ふ筈なるを以て、在留邦人の來訪するもの多し、午後六時より上野領事送別の宴を領事館に張る。猊下一行を隨へて之に臨み給ふ。

八日　十二時東洋汽船會社の香港丸に乘船す、上野領事始め本邦人二十餘名、三井物産會社の小蒸汽船にて本船まで送り來る、午後一時拔錨徐々港外に向て進行す。

紀元節

九日　天氣快晴風日麗に海上靜穩なり、一同船室に集りて談笑し時に相携へて甲板を歩す。

十日　朝來天曇り午後に至りて降雨となる、海色濛として四方一物を認めず、船室に團欒して終日無聊を消す。

十一日　午前九時上海沖に投錨す、小蒸汽にて黃浦江を遡り十一時上海に上陸し、埠頭より馬車に乘じて米租界アストルハウスホテルに投ず、此日紀元節なるを以て、碇泊の大島、筑紫の本邦軍艦一齊に滿艦飾を施して祝意を表し、英、佛、米、伊の各國軍艦も滿艦飾を爲す。支那人は陰曆正月二日に當るを以て、市街到る處爆竹の戲を爲し、其響爆々として

遠近相傳ふ。吳淞沖に碇泊の南洋艦隊數隻同敷滿艦飾を施せり。小田切領事來訪、次で本邦人十數名の來訪あり、大谷派別院輪番佐野即悟次で亦來る。十二日　上海大谷派別院に御代香差遣はさる。杭州留學生監督香川嘿識學生數名を率て來り諸事を斡旋せり。午後郵船會社支店長來る。

十三日　午前馬車を驅りて市中を巡覽す。小田切總領事。三井物産會社支店長來訪す。午後五時より在留邦人の青年者十餘名をホテルに會して晩餐を饗應す。

十四日　徐家滙に加特利克教會の寺院並に孤兒院を訪ふ。徐家滙は上海を距る西方約六哩に在り、城市の喧噪を離れたる閑靜の一村落なり、同教が初めて

加特利克教會井に孤兒院を訪ふ

此地方の布教に着手せしは、今より凡そ百年前に在りと云ふ。現今の建築は千八百五十一年のものに係る、寺院の外男女の學校、孤兒院等の設けあり、佛國の宣教師十餘名常に此に在りて、支那人の宣教師を養成するを以て目的とせり、而して佛國の宣教師等は服裝辮髮全く支那風に粧ふて、自在に支那語を操れり。到れば乃ち一行を導て禮拜堂、教場、圖書館、孤兒院等を巡覽せしむ、圖書館の設備は就中最完全せるが如し、洋書は勿論大低の漢書は之を貯藏せり、教室には各室耶蘇基督の畫像を掲ぐ、孤兒院には未就業の孤兒百餘名あり、支那人の牧師を以て保護監督者と爲せり。人誰か一見して其忍耐の堅固

なるに驚かざらん、一行參觀の際無限の感慨を發せり。

十五日　雨天　午後六時より小田切領事晩餐會を領事館内に設けて　猊下一行を迎ふ。

十六日　在留本邦人の來訪者多く　猊下一々御會談あり。

十七日　雨天　大島、筑紫の兩艦長來訪す。隨行市川達讓用務を帶びて明日歸朝に決す。

十八日　此日上海を發して杭州に向ふ。新に支那人李阿福を伴ふ。（李は上海の人曾て大坂に在る事七年間自由に日本語を話す最も料理の術に精し）上海杭州間の往來は總て運河の便に依る。旅客は支那船に乘り、貨物は別に荷船に搭載し、小蒸汽を以

て之を曳く、大抵毎日便船あり、現今此曳船業を營む會社清商戴生昌、源裕の二會社の外、邦人の設立せる大東新利洋行あり、明治二十九年八月より開業せり。一行は新利洋行の小蒸汽に曳かれて運河を上る、兩岸一丘一樹の觀るべき無く、唯累々たる墳墓と無數村落の散點せるある耳、光景蕭條たり。

十九日　朝來微雨あり、午後嘉興縣の下を過ぐ、人家數百相連り城内は頗る繁華なるが如し。

嘉興縣

嘉興縣は嘉興府治の在るところ、杭州府海寧州の境を距る南六十清里、春秋の時吳越の彊たり、戰國楚に屬す、秦由拳縣を置き會稽郡に屬す、三國吳に屬す、宋嘉興府治と爲す、明清之に由

る、形勢海を控へ江に沿ひ、土俗農を勤め、婦女機杼に巧みなりと云ふ。

廿日　午前七時船拱宸橋に着す、大谷派布教使、本派留學生等の出迎ふるあり。拱宸橋は仁和縣の北新關外に在り、西湖苕溪の水此に流る、杭州に到る運河の上陸點にして、府城を距る五哩、今や各國の居留地たり。開放日尚淺く百事草創に在りと云へども、漸次發達の運に向ひつゝあり。昨年二三月の頃には人家漸く百に滿たず、人口四五百なりしも、昨今橋の兩岸は家屋櫛比して空地を存せず、上海より馬車人力車の輸せらるゝあり、人口日を追て增加し既に三千餘に達せりと云ふ。

杭州府

一行新利洋行の支店に入り、小時休憩後、轎子を連ねて武林門より府城に入り、日本領事館に投ず。

杭州府は浙江省の首府にして、上海を距る西南百五十哩、蘇州の南百二十哩に在り、廻らすに城壁を以てし、武林、清波、湧金、慶春等の數門を設けて城の內外を通ず。現今人口七十五萬ありと稱す。形勝の美と文物の殷盛とを以て、蘇州と名を齊ふす、南清の繁華を說く者必ず蘇杭を稱せざる無し。殊に支那織物の特產地を以て夙に名を東西に知らる。水運の利四通八達して商貨輻湊し、城內最も喧豗を極む。千八百五十三年長髮賊の亂を蒙り、市城大半破

壞に歸せしが、其後漸次恢復して稍舊觀を保てり。明治廿八年の日清條約によりて初めて貿易地と爲る。一昨年の貿易總額七百六十七萬餘、現今在留本邦人三十名あるも、商業に從事する者少なく、領事館員學生郵便局員等多數を占め居れり。

此地は禹貢揚州の域、春秋越の西境たり、戰國楚に屬し、秦初めて錢塘縣を置き會稽郡に屬す、漢會稽郡たり、隋に至り郡を廢して杭州を置く、三年改めて餘杭郡と爲す。唐武德四年復杭州を置く、五代の時錢謬國を建て杭州に都し西府と稱す。宋建炎三年行在所と爲し臨安府と改む、

明に至りて杭州府を置く清之に由る。

有名なる立馬吳山第一峰は府城の西南隅に在り、舊胥山と號す、山上吳子胥の祠あり、錢塘江を左にし西湖を右にし眺望絶佳なり。然れども一小丘に過ぎず。

此日午後杭州駐在大谷派連枝流情院大谷勝緣師來訪あり、師は清國布教の爲め數名の布教師留學生と共に昨年渡航せられ、爾來專心布教に從事しつゝあり。

二十一日　微雨あり雨中轎子に乘じて一行湧金門を出で、西湖の西岸より舟に棹して對岸に渡り、此に有名なる宋岳王之廟を吊ふ。門を入れば道の右方に秦檜、王氏、萬俟卨の三賊を縛せる石像あり（三賊は宋末の奸臣にして忠を退け和を主として終に宋の社稷を亡ぼせり）第二門に到れば門前に

宋岳飛の墓

人物羊馬の石像を對立せり。門に入れば正面に宋鄂岳王之墓と記せる石碑あり、其後方經十五呎半圓球の墳墓は、是れ實に宋末の忠臣岳飛が萬古不磨の忠魂を留めたる處、之と並びて飛が子雲の墓あり。此を去て蠶學館に至る、支那人に養蠶に必須の諸學課を教授するの學館なるも、設備未だ完からず、現今專ら日本語を教授せり、學生五十餘名、日本人の教師二名あり。一行再び舟に乘じて歸途に就き、湧金門を入りて本願寺公館に立寄り、其れより領事館に歸る。（本願寺公館は本派の出張所として今回新に設置せしものなり監督香川嘿識其他布教使留學生等皆此に住し清國布教の本營なり保安橋街に在り）

二十二日　朝來降雨甚敗を以て終日出です、館員及

西湖の探勝

錢王の祠

表忠觀碑

在留邦人等と會して清國の形勢を話し、將來布教開拓の方法等を講ず。

二十三日　夜來雨霽れて天氣快晴、一行乃ち舟を艤して西湖の探勝を試む、錢塘門を出で湖の南岸より徐に舟を進む、行く〳〵湖上の風光を賞し、湧水門を過ぎて下れば錢王の祠あり、古柳數株祠邊を繞る、一亭あり柳浪聞鶯亭と云ふ、西湖十景の一なり。祠は堂宇壯大ならずと云へども、有名なる表忠觀碑は此處に在り、惜ひ哉東坡眞蹟の碑は髮賊の亂に破壞せられ、今は其一半を存するのみ、近時摸刻の碑あり。去りて清波門を左方に望み、南屏山の下より上りて淨慈寺に詣る、周顯德元年錢王宏俶の建る所、始

雷峰塔

め慧日永明院と號す、宋太宗壽寧禪院と改め、紹興九年又淨慈報恩光孝禪寺と改む。歷朝の崇奉最厚く、堂塔壯麗を極めたりしも、數回々祿の災を經て、今は僅に舊趾を存するに過ぎず、三五の僧徒ありて佛像を護するを見る。寺の前方小邱の上に高塔あり高三百呎、臺基の徑六十呎、八角五層にして形奇古所謂雷峰塔是れなり。吳越王妃黃氏の建るところ、內に石刻華嚴經の碑八枚を藏す、小楷絶妙なりと云ふ。元金銅羅漢の像丈各數丈なるもの十六尊を安ぜしが、今は移して淨慈寺に在り。此を去りて蘇堤の中央に架する映波橋を過ぎ內湖に出れば、岸に臨んで一亭あり、亭前小堤を築きて水を劃す、花港と稱す、前

孤山

林和靖之墓

西湖

朝觀魚の式を行ひし處花港觀魚又十景の一なり。其れより後湖に入り孤山の北岸に上る（西湖を分ちて三とす蘇堤南北に通じて內湖外湖を限り白堤東西に亘りて更に外湖の一部を分つ之れを後湖と稱す）孤山は湖中の一嶋にして、世に名高き林和靖の墓は此處に在り、山の半腹植るに數株の梅樹を以てし、墓は其中に在り、林和靖之墓の碑を建つ、墓門荒廢して草萊徑を沒す。午後六時日漸く暮る、一行舟を回して錢塘門外より上陸して歸館す、無堂詩あり。

月上垂楊外　舟行白浪間　春寒鶯未囀
天暮鶴先還　塔影攙雲聳　鐘聲度水閑
欲探興亡事　老父指前山

西湖は古明聖湖と稱す、一名錢塘湖又上湖とも

白堤
蘇堤
楊堤

金牛湖とも云ふ、府の西に在るを以て西湖と名く。三面山を以て環らし周廻三十清里（我六里に當る）溪谷の水滙して湖となる。唐の大歴中刺史李泌一度浚渫し、其後長慶中刺史白居易（字樂天）重ねて修理を加へ、長堤を築き、新橋より孤山に通ず、白堤是れなり。宋の元祐五年蘇軾（字東坡）杭州に知たり、汚泥を浚して長堤を築き、兩岸榆楊花木を雜植し、架するに六橋を以てす、蘇堤是れなり。明の正德三年郡守楊孟瑛更に修渫して內湖の西岸に築く、楊堤是れなり。西湖の勝は唐宋以來既に久敷天下に聞ふ、然れども其の今日の如く名聲喧傳し世人支那の西湖を知らざる者なきに至りしは、清の康熙帝屢々南巡して蹕を孤山に駐め、因て行宮を建て題咏自ら娛しみ、之が爲め山川風物新に面目を開きしに因る。其後も屢々巡幸ありて、其度亭を築き石に勒して御製の詩を刻する等、努めて舊觀を保存するに力を用ひしかば、今日に至りて其風光の美は、他の支那大陸の概して平板なるに似ず、獨り此地のみ殆ど別天地の觀あり。湖中の名勝は其數甚だ多し、一々記するに遑あらず、且く十景なるものを擧ぐれば左の如し。

湖中の十景

平湖秋月。　蘇堤春曉。　雷峰夕照。　南屏晚鐘。
曲院荷風。　花港觀魚。　柳浪聞鶯。　三潭印月。

双峯挿雲。斷橋殘雪。

有名なる孤山は湖中の稍西方に在り、一島孤立して四面附帶なし、故に孤山と名く、林和靖此に棲隱せしより其名特に著る（宋史に林逋字は君復杭州錢塘の人なり少にして孤となる性恬淡初江淮の間に放浪す後杭州に歸り廬を西湖の孤山に結んで居る二十餘年足一度も城市に至らず眞宗其名を聞て粟帛を賜ふ曾て自ら墓を廬側に築く臨終の詩に曰。茂陵他日求遺稿。猶喜曾無封禪書と以て其人となりを知るべし仁宗其死を聞て嗟歎し謚を賜ふて和靖先生と云ふ終身要らずして生を卒ふ）巢居閣、水亭、梅亭、放鶴亭等皆其舊跡なり、和靖の墓は放鶴亭の北に在りて、其祠は墓の少しく後方に在り。

聖因寺は錦帶橋の西に在り、元康熙帝の行宮なりしを、雍正五年世宗命じて寺と爲し、聖祖の木主を奉ぜしむ、建築宏壯にして貴重の什寶頗る多しと云ふ。此處より俯して全湖の勝を一覽すべし、風色絶佳なり、山下の長堤は白堤なり。斷橋より西泠橋に至る、橋畔草萊の間一小墳あり、之を蘇小々の墓と爲す。（蘇小々は古錢塘の名妓姿色絶麗頗る文才あり少くして病で死す）所謂西泠橋畔蘇小墓なるものの是れなり。斷橋は堤の入り口に在り、北の小亭は斷橋殘雪亭なり、又其北に平湖秋月亭あり、亭前十景の一の碑は聖祖（康熙帝）の筆なり。東坡菴は報恩院に在り、東坡自ら築く所、院主惠靭詩文に巧みに、坡之と往來最も親みしと云ふ。

蘇堤に六橋を架す、北の第一橋に花港觀魚亭あ

林和靖

聖因寺

蘇小の墓

東坡菴

り第三橋に蘇堤春曉樓あり曲院荷風亭、崇文書院、秋水觀等は第六橋に在り、其他金沙港、湖心亭、關帝廟、三潭印月等の勝は、皆內外二湖の間到る處に羅散せり。

棲霞嶺

棲霞嶺は一名履泰山、舊多く桃花を栽ふ、岳王廟は其下に在り、一に忠烈廟と云ふ、山中紫雲洞、棲霞洞、金鼓洞、黃龍洞、天龍洞等の勝あり。

雲林寺

普濟院。九里松、行春橋あり、行春橋の西に當りて、一峯中斷して兩立するものを双峯插雲と云ふ、亦十景の一なり。

雲林寺は湖北靈隱山に在り、故に又靈隱寺とも云ふ、晉咸和元年西僧慧理なる者あり、曾て登

飛來峯

山して曰く、是れ佛在時靈仙の隱棲する所と、因て名く。康熙帝勅して今の名に改む、本堂は髮賊の亂に灰燼に附せしも、僧堂、客室、本門のみ僅に災を免れ、僧徒今尙二百名あり。門前左側の一峯を飛來峯と云ふ、僧慧理曾て曰く、是れ中天竺靈鷲山の別峯なり、知らず何の年にか飛來せると、後人因て以て名く。高數十丈峯前石塔あり、古色蒼然たり、怪岩壁立して樹根悉く石を抱き、薜蘿倒生す、壁間無數の佛像を刻す、元の僧楊璉眞伽の爲す所ろと云ふ。懸厓の上飛來峰の三大字は康熙帝の筆なり。峰下に石の洞門あり、龍泓洞と云ふ、洞壁には四方來

天竺山

遊者の氏名を記せり、中に日本日下鳴鶴明治二十四年來遊等の文字あるを見る、洞門の左右修竹茂樹清流潺湲、其間山房亭榭を構へ幽邃比無し。天竺山は上中下の三あり、飛來峰の南に在るを下天竺と云ひ、法鏡寺と稱す、僧慧理の創建に係る、唐の末一度焚く、吳越王錢鏐再興して、五百羅漢院を建つ、元の末再度燬け、明の洪武間復建つ、清に至り乾隆帝法鏡寺の額を賜ふ。稽留峯の北に在るを中天竺と云ひ、法流寺と稱す、隋の開皇中西僧寶掌此に入定して道場を草剏す、其後吳越王改めて崇壽院を建つ、明洪武の初め中天竺禪寺と稱す、康熙帝靈竺慈緣の

蘇學館

額を賜ふ。北高峰の麓に在るを上竺と爲し、法喜寺と稱す、後晉の天福四年、僧道翊靈瑞を感じて觀音の像を刻し堂宇を建立す、元の至元三年一度焚く、五年重て建つ。三寺とも建築宏壯、歷朝の崇奉最も厚し。春時兩省（浙江蘇江）の俗天竺進香と稱して參詣群集す。柳浪聞鶯亭は錢王祠の右に在り、南屏晚鐘亭は慈淨寺山門前に在り、萬工池に臨む、雷峰に雷峰塔あり、雷峰夕照亭は山麓に在り、何れも御製の詩の題額あり、十景の一なり。

蘇學館は蘇堤の金沙港に在り清國舊來の養蘇法を改めて、日本現時の新法に依るの目的を以て

建てられたるものなり。二名の邦人を聘して教師と爲し、傍ら日本語を教授せり。

二十四日　天氣快晴此日は恰も陰曆一月十五日なるを以て、一行便ち有名なる錢塘江の逆潮を觀る。午前十時領事館員と共に轎子或は騎馬にて發す、慶春門を出で行くこと一哩餘にして江岸の街道に出づ、平坦砥の如く直に海寧に通ず。潮を觀るは海寧を最も宜しとすれども、行程遠きを以て中途に於て觀る。午後二時潮の方に至らんとするや、無數の支那船帆を揚げ潮に乘じて來る。其狀恰も白鷺の點々たるに同じ、亦奇觀なり。然れども此處江の上流に在りて潮勢稍緩なるを以て壯觀と云ふに至らず。聞く海寧附

錢塘江の逆潮を觀る

近に在りては潮の海上より來る高さ十五尺、澎湃として瀑流の如く、壯觀云ふ可らずと、午後四時歸館す。

二十五日　天竺寺に遊ぶの豫定なりしも、朝來降雨の爲め果さず、午後雨止みたれば一同飛來峯に遊ぶ。錢塘門より舟を艤し、湖を渡りて西岸茅家埠より上陸し、一哩餘にして飛來峯に到る、全峯岩石より成る一小邱にして、岩面多く佛像を刻す、數十歩にして靈隱寺に至る、堂宇宏壯杭州寺院中の最大なるものなりと云ふ。住僧百餘名あり導て方丈に通じ、長老出て挨拶す、長時間教義上の問答を試む、彼等頗る喜色あり、宗派は淨土と禪とを混ぜるものゝ如し、此夜一同日本蠶學館に宿す。

紫雲洞

上海に向ふ

二十六日　晨起行て岳王廟の後方山中約一哩の處に在る洞窟を觀る、紫雲洞と云ふ、洞は背後の山腹に通ず、自由に出入すべし。

二十七日　上海に向て出發す、午前大谷派連枝流情院勝信師隨員松林、福永と共に送別の爲め來訪あり、午後二時領事館を出で、拱宸橋に到り新利洋行支店に一泊す。

二十八日　猊下は多數の見送人に對し懇に別を告げ給ひ、一行と共に上船す、顧れば西湖の勝歴々とし て眼中に在り、山光水色遙に一行を送り來るを覺ふ。

二十九日　嘉興縣を過ぎ十二時上海に歸着し、一行ァストルハウスに投ず。

別に記すべき事なきの間却て是れ大に記すべきものあり

三十日より三月三日に至る此四日間は別に記すべき事なく、三月一日上原芳太郎南洋探檢より來りて一行に加はる。猊下は多く館内に在り、時々來訪者に接して對談の外は、非常の勉强を以て諸種の取調べに從事せられ、武田以下各方面に手を分ちて熱心調査するところあり、時には市街を微行して親敷風俗人情を察する等、要するに皆他日布教開拓の材料を蒐集せんが爲めにして、別に記すべき事なき此數日間こそ實は大に記すべきものあるを知らざる可らず。

三月四日　猊下は正午正金銀行支店の招待に依りて其宴席に臨み、午後六時よりは在留邦人の送別會に到らせらる。同夜十一時郵船會社の波止場より天龍

漢口に向ふ

川丸に乘じ漢口に向て出發す、小田切領事以下見送人多し。一行は是より數日間長江の航途に在り、長汀曲浦沿岸の光景眼に轉じて新なるものあり。

五日　午前三時曉烟模糊の中に船埠頭を離れて大江を遡る、午前十時七十五哩を過ぎて通州に寄港す。

通州

通州は長江右岸の一小驛なり、州域は周回六清里四方に門あり、周の顯德中築く所、明萬曆中增築す、城後の山を狼山と云ひ、山下を狼山渡と稱す、通州より二十七哩にして江陰縣あり、此間兩岸開豁して江水大湖の如く、森々絶目の觀あり。西岸の平野には往々黃菜綠麥の散點するを見る土地頗る肥饒せり。左右兩岸の丘陵に砲壘あり、五十餘門の大砲を備へたりと云ふも、多くは舊式に屬し、之を以て一朝不虞の變に備へん事は殆ど難矣と云ふべし。左岸の小都會は江陰縣なり、四時泰興に寄港し直に出發、四十哩にして夜九時鎭江に着す、繫留二時間にして十一時發す。

鎭江

鎭江は上海の上流二百三十哩に在り、大江の南岸に沿ひ運河の會流點に當り、水利の便に富むを以て貨物の集散地として江寧（南京）の門戸たり。市街平坦にして人口十四萬あり、江上の一島を焦山島と云ふ、風色亦佳なり。此地千八百五十八年の天津條約に依りて開港地となりたる以來、一度髮賊の亂に罹りしも、現今稍舊觀に復せり、新舊二教の大なる教會堂あり。

六日　午前一時儀徵を過ぎ同三時南京に寄港し、四時發す。

南京

南京は今江甯府と稱す、兩江總督の所在地にして、地勢大江に據り重嶺に連り、文物殷盛に產物豐富なり。人口四十萬あり、府城は六朝の舊趾にして近く秦淮に接し、東鍾山の麓を盡し、周回七十清里に亘りて、城壁の高さ五丈より七丈に及ぶ、明の洪武年間に築く所、規模宏壯にし江南の省城たるに愧ぢず。

市街の家屋は其の構造概ね優雅なり、市民業を勵み婦女は刺繡に巧みに、男子は六朝の遺風を存して風流儒雅を貴び、往々君子の風あり。四方翰墨の士爭ふて此地に來り、稱して江南の人物と云ふに至る。此地千八百五十八年の佛蘭西條約に依りて開港地となり、且南部形勝の重鎭たるを以て滿州八旗兵の駐防あり、將軍副都統を置き之を率ふ。

鍾山

鍾山は府城の東北隅に聳へ、地を拔く事七百尺、其北端より聯亘する丘陵を覆舟山と云ふ、形の似たるを以て名く。獅子山、球山、相連りて城の三面を擁し、西南一帶江に向ふて平地に屬す。南門外に百五十尺の高臺あり、城中を眼下に望むべし、有名なる金陵の雨花臺是れなり。臺は一名を寶聚山とも云ふ、山下に金陵機器局あり（雨花臺は梁の武帝の時僧あり經を此處に講ぜしに感應ありて天花を雨ら

金陵の雨華臺

せし處と云ふ物産は頗る豐饒にして、就中綿、緞、綾羅、絹帛は特に精巧と稱す、又南京繻子の製造を以ては蘇州、杭州と支那の三大著名地たり。

此地は禹貢楊州の域、春秋吳に屬し、戰國楚に屬す、楚の威王始めて金陵邑を置く、蓋し其地山水秀麗にして王者の氣の埋藏する所、古へ金鎭の名あるを以てなり。秦の始皇秣陵と改め、鄣郡に屬し、漢丹陽郡の地たり、三國の時吳都を此に建て、建業と云ふ、晉建康と改む、齊梁陳相次で此に都す、隋に至り改めて蔣州と云ふ、宋建康に復し、元集慶と稱し、明に至りて大に修築を加へ、永く奠鼎の地と定め、應天府と號

大報恩寺の磁製塔

蕪湖

す、有名なる大報恩寺の磁製塔の如き、明の成祖の建立する所にして、八角八稜九層あり、五綵璨爛として人目を眩するばかりなりしと云ふし、惜しむ可し髮賊の亂悉く灰燼に附し、今は僅に遺墟を止むるのみ。

午前十時蕪湖に寄港す、南京を距る五十二哩なり。

蕪湖は安徽省大平府に屬し、九江と鎭江との中間に在る大江の一要地なり。上海を遡る事三百四十哩、鎭江の上流百十哩に在り、南は運河に依て甯國府に通じ、西南大平縣に達す、河船交通の衝に當り、現今貿易頗る繁盛せり。市街は江の左岸に在りて人口八萬餘、重なる商業は米、

豆、絹織物、茶、烟草等なり。

十一時拔錨、五十九哩にして午後六時三十分大通に寄港す、同十一時安慶に寄港す、此日午後より俄に寒氣を催し、江色空濛細雨霏々として至り、船中無聊を感ず、猊下隨行者と同じく、吳楚東南坼、乾坤日夜浮の十字を以て韻を分ち詩を賦し賜ふ。

七日　安慶より八十八哩を過ぎ午後一時九江に着す。

九江は江の右岸に在りて、亦日清貿易港の一なり、上海の上流四百五十二哩、漢口の下流百八十七哩の處に在り、人口凡そ六萬、江西全省の鎖鑰にして漢口、鎮江に次で繁華の地なり。府城は長江に瀕し、丘陵に據り、周廻十二清里餘

歴史

白樂天の琵琶行を歌ひし地

城壁の高さ一丈五尺に及ぶ、漢口、福州と共に支那茶の三大市場たるを以て有名なり、居留地は城外の岸に在り。

此地は禹貢荊楊二州の域、春秋吳楚の地たり、秦九江郡に屬し、漢豫章に屬す、晉には潯陽と云ひ、隋には復九江と云ふ、大江を控へ南門湖に臨み、下流十七哩にして直に鄱陽湖に至る、實に水陸要衝の地たり。白樂天が琵琶行を歌ふて千古騷人の腸を絶しは即ち此地なり。

一時四十分九江を發し、二十七哩を過ぎて武穴に寄港す。此附近は長江沿岸中最も溫暖の地にして、堤邊の楡柳早く既に黛色を呈し、遠く望めば隴畝の間

鐵鎖沉江。楚江鎖鑰

夕陽水に映じて柳汀芦渚水禽の飛ぶを見る風景畫の如し

菜花の盛に開くを見る。船此處に至れば、兩岸漸く迫りて恰も甕を括するが如し。左方の絶壁を半邀山一名烏洞山と云ふ。斷崖の上『鉄鎖沉江。楚江鎖鑰』の八大字を刻す、蓋し三國の時晉將王濬吳を攻め、大鐵鎖を燒て江を渡りし處、所謂千尋鐵鎖沉江底。一片降旗出石頭と云ふもの是れなり。此處を過ぐれば江水復濶く、岸遠く山平に、左岸人家あり田家鎮と云ふ、夕陽水に映じて柳汀蘆渚水禽の飛び交ふを見る風景畫の如し。四十三哩を經て夜九時五十分黄石港に寄港す、内地の鐵材を輸出するを以て名あり、市街は右岸にあり。

八日　午前三十分二十二哩にして黄州に寄港し、更

赤壁

に五十哩にして漢口に入り、商船會社の埠頭に着す、時に午前七時なり。有名なる赤壁は黄州の上流に在りしも今曉夢裏に通過せり。

埠頭には一行に一日先ちて發せし香川及瀬川領事、會社の支店員と共に出迎へ居れり。猊下は直に東肥洋行に入らせらる。續て瀬川領事其他の訪問者多し、當地洋務總辨何蔚仲氏、特に警吏一名兵士二名を派して御滯在中の警護に充つ。午後二時轎子を命じて日本領事館御訪問あり。領事館は市の東南英國居留地の中に在り、領事の案内にて英國居留地を過ぎ、露佛二國の居留地を經て、通濟門より長江の岸に出づ。門外は獨逸の居留地にして、其隣地は我居留地

なり、地域内一巡の後、清人の設立に係る燐寸製造所と（樊昌火柴公司と云ふ）獨人の所有なる鷄卵製造所を巡覽し、歸途領事館に於て一行共に晩餐の饗應を受く、洋務總辨何氏等座に在り、此夜降雨時々輕雷を聞く。

九日　午前十時　猊下は瀨川領事と共に、佛國領事を其領事館に訪ひ、同領事の紹介にて、更に同居留地倶樂部に滯在中の、同國技師某に御面會あり、某は數日前北京より陸路を經て當地に着せるもの、此の御面會は實に一行が內地橫斷大旅行の爲めに勸なからざる便宜を得たりと云ふ、暫時御談話の後領事館を出で、其れより露國居留地に至りて、磚茶製造所を縱覽せり、同所は露人の設立に係り、一日紅茶

武備學堂、自强學堂を觀る

晴川閣

漢陽の鐵製局

六十五枚入りのもの、綠茶四十五枚入のもの各百四十五箱を製出す（磚茶は紅綠茶の粉沫を蒸し壓迫して適當の平板と爲したるものにして露人は之を嗜好せり）午後二時より武昌に到り、有名なる張之洞の武備學堂、及自强學堂等を巡覽す。武備學堂は現今百五十餘名の生徒を有し、兵學專門の學堂にして、獨逸教師二名と、他に邦人大原某外數名ありて、翻譯編輯の任に當れり。歸途漢陽に到り晴川閣等の勝地を遊覽す（崔顥黃鶴樓の詩に曰く晴川歷々漢陽樹と後人因て晴川閣を建つ）

十日　午前十時瀨川領事の案內にて漢陽の鐵政局を觀る、鐵政局は別ちて製鉄槍礮の二廠とす、總督張之洞が淸廷の許可を得て創設さるものに係る。一行到るや張氏の電命と稱して主幹某等數名迎接し、遍く

場内を案内せり。一見規模頗る宏大にして、設備完全せるが如し、現今傭聘の外人二十名ありて、内十七名は白耳義人、他は皆英人なり、原料の礦鐵は大冶縣の産出にして、石炭は内地産及本邦産のものを用ひ居れり　昨年中の製造額を聞くに、八十五磅の鐵軌凡そ六萬四千噸を製出せりと。製鐵廠を出て槍礮廠に入れば、主幹等の迎接前に異ならず、同所は現今製造に在るもの三十七ミリ速射砲、十二珊速射砲及彈丸、中モーゼル式小銃及同彈丸等なり。一行導かれて客室に入り酒菓の饗を受け、又紀念として砲彈一箇の贈を受く。

十一日　此日商船會社支店の招待に依り、午後六時より、猊下一行と共に同店に赴かせらる。

十二日　午前自強學堂の日本語學科生徒二名伺候す。猊下御對話あり。彼等少しく日本語を話し得るを以て、種々日本の事情を尋ね。他日必一度渡航すべき旨を陳ぶ。携へ來りたる寫眞器、望遠鏡等を取て一々説明を與へ、且渡航せば相當の便宜を與ふ可き旨を語るに彼等は喜びて辭し去れり。正午湖廣總督標中營都司衛田天林來訪し、統領張壽廷の意を傳へて云ふ、本日午後軍船を以て一行を迎へ、江漢の名勝を案内し、歸途總署に於て聊か晩餐の供を爲さんと、然れども一行出發の期既に迫るを以て採勝の事は再遊を約し。晩餐は其好意を謝し、單に軍船を借りて總署を訪問すべきを約し時間を期して別る。午後三

時約の如く軍船到る、一行之に乘じて江を遡る、船上には數旒の黃龍旗を樹てたり、船中に在りて田等應接頗る勉む。既にして船漢陽城下に着す。江左碼頭より上陸す、兵士數名前後を警衛して總署に到り、中門內にて輿を下れば、張統領迎へて此に在り、後堂に請じて茶菓を供し、暫時對話の後、張、田、諸氏と共に歸元寺に詣る、寺は漢陽縣の西に在り、順治中の建立にして、大平興國寺、觀音泉寺と幷せて三大寺の一なり。總署より別に一隊の洋式銃卒を派して、嚴に途上を護衛せしむ、沿道驚異視るも の堵の如し。寺に詣れば遇〻住職在らず、首座の僧出迎ふ、暫時休憩後、本堂、拜佛堂、坐禪堂、五百

總署を訪問す

歸元寺に詣る

伯牙臺

羅漢堂、經樓、寮舍等を巡覽す、此寺髮賊の亂に燒亡したるを、近代再建して前記諸堂の外、食堂、書院に至るまで總て落成し目下五百羅漢の像を造營中にて、其の一半は既に成功せり。住侶は二百名許あり、日々二回の勤式と、數基の羅漢像を造るを以て日課とせり、勤式は朝は楞嚴經を讀み、夕は彌陀經を誦す。經樓には唐、宋、明の各版大藏を納む、猊下より特に往生要集一部と、料物若干とを寄進せらる。斯くて一行寺を出で有名なる伯牙臺に上る、臺は固より近代の修築に係り、見るに足る無しと云へども、欄前の月湖と簾外の魯山と眺望頗る佳なり、月湖堤を過ぎ漢水を渡り夜に入りて歸館す。

大旅行の準備

十三日　此日午前松原深諦山命を帶びて上海より來着す、午後四時　猊下松原、香川を從へ田の宴席に臨ませらる。　歸元寺の役僧三名昨日の返禮として來る。

十四日　午前自强學堂の生徒數名伺候す。　明日は愈々當地出發、　陸路北京に向て大陸横斷の大旅行に上る可き豫定なるを以て、　前日來之が準備に忙がはしく、　先づ旅行用として傭入れたるは馬車六輛、　馬匹十八頭、　馬丁八名なるが、　此中馬車は此地に無かりしも、　幸ひ前日面會したる佛國技師が、　北京より傭ひ來れる馬車の、　留めて信陽に在る者を、　同國領事の周旋にて傭ひ受くる事となれり（信陽州は河南省汝寧府に在り漢口を距る五日程、道路險惡の爲め馬車を此地に留めたるなり）馬丁は悉く北京人にして、　頑

牛夜江聲夢を驚かすの處一行の感果して如何ぞや

陋無智の下等人種なるを以て、　拘束の必要あるにより嚴重の契約書を交換せり、　是等の事に關しては田氏等大に斡旋の勞を執れり。　斯くの如くして大陸横斷の準備は不十分ながら大略整頓せり。　神戸出發より今日まで五十餘日、　上海香港等の各地到る處本邦領事の周旋と、　在留邦人の歡迎とにより、　旅行とは最も安然に、　且愉快なる旅行中に在りし。　猊下を初め一行は、　明日より道路と云ふ道路無く、　旅舍と云ふ旅舍無き、　浩々莽々たる二千五百清里の內地を横斷して北京に到る可く、　古今稀に有るの大旅行に向て出發せざるべからず、　半夜江聲夢を驚すの處一行の感果して如何なりしぞ。

漢口は湖北省漢陽府漢陽縣に屬す、上海の上流二千三百七十清里に在り(大約我三百七十四里)東大江を隔て武昌と對し、西漢水を挾んで漢陽に接す、三市鼎立して支那南部の一大都會なり、河南の朱仙、江西の景德、廣東の佛山と共に天下四大鎭の稱あり。殊に一帆長江を遡れば直に四川の寶庫に入る可く、一棹漢水に投ずれば忽ちにして陝西に到る可し、水陸の要衝に據り、形勝の便を占め、貿易の繁昌、人物の殷盛は上海に次で年々盛大に赴けり。市街は江の西岸に沿て漢水に連なり、長さ凡そ三里幅二十五町餘、中街、後街、河街の三大街に分ち、商家櫛比して往來雜沓を極む、然れども支那街の不潔なるは他と異る無し。方今此地の人口八十萬と稱す、所謂る五方雜處四民雲集して、貴賤貧富相雜居して、風俗一樣ならず、間〻慓悍無賴の徒ありて群を爲すと云ふ。

千八百六十一年此地を開きて開港場と爲せし以來、貿易駸々として發達し、一昨年に至りて其輸出入總額四千九百七十餘萬の多きに上れり、江漢の沿岸には支那碼頭八箇所ありて、大小船舶出入碇繫し、十餘隻の汽船日々江を上下し、行旅頻繁にして百貨埠頭に輻湊し、近來重慶を開きたるより一層繁華を加へたり。

氣候

一種の臭虫ありて旅客を苦しむ

氣候は毎年十一月より翌年三月に至る迄を寒期とし、二月中を極寒とす、寒暖計二十四五度に降る、五月より九月を暑期とし、七八兩月を極暑とす、百度以上に上るとあり、九月中雨多く江水增長す、冬の間降雪三四回あり、或は積んで尺餘に至ると云ふ、夏日は蚊虻の類頗る多く、屋内には一種の臭虫ありて、旅客を苦しむる事大なり。

武昌府

電信局、銀行、新聞社あり、新聞は漢報と稱する漢字新聞なりしが、明治二十九年本邦人宗像某の所有に歸せり。

武昌府は省治の所在地にて、湖廣總督張之洞之を鎮す、江を隔て漢口漢陽と對し、人口十五萬あり、有名なる武昌の紡績官局は文昌門外に在り。規模宏壯にして諸事整頓せり、紡績織物を製出す、機數一千臺、錘數三萬六千を有し、職工晝夜合せて三千六百人を使役せり。湖北銀元局は城内に在て、恰も我造幣局の如く專ら銀貨鑄造に從事せり、現今甚だ盛大ならずと云へども、張之洞曾て洋銀の濫入を憂へ、之を防遏する目的を以て設立し、爾來鋭意して擴張に努めり居れば、前途多望ならずと云ふ可らず。湖北繅糸局は同敷城内に在りて、從來の舊法を改めて文明的となせる養蠶製糸場にして、目下釜數三

百八あり、職工三百人大概女工にして男工は三十人あるのみ、一日の製糸高上等三十斤下等十八九斤なりと云ふ。以上何れも張之洞の經營に係る、以て張が如何に文明的實業の發達に力を用ひつゝあるかを知るべし。

武昌及び漢陽は、古來支那の歴史上著名の地なり。禹貢荊州の域、周の時楚に屬し、秦の時南郡たり、漢江夏郡を置き、三國吳に屬し初めて武昌郡を置く、唐改めて鄂州と云ひ、江南西道に屬す、天寶の初め又江夏郡に復す、明に至りて武昌府を置く。現今の府城は順治中曾て一度修治し、其後雍正五年重て修理を加へたる者なり、周廻我三里餘、西大江に臨み三方濠を廻らし、九門あり以て往來を通ず、有名なる赤壁山は江の南岸に聳へて北岸の赤壁と對峙す、三國吳の將周瑜が曹操の大軍を破りし處なりと云ふ。

第三章

大陸横斷……漢口より北京に到る

支那内地旅行の如何に困難なるかは、實際旅行せしものにあらざれば以て語るべからず、支那旅行者が第一困難を感ずるは道路の險惡なると、到る處所謂客棧(旅舍)の不備不潔なると、とに在り、特に客棧の不潔に至りては普通外人の到底耐へざる所にして、著名の都會に在るものと云へども尚臭穢紛々たるを免れず、少數沿道地方に入りては、實は客棧と稱すべきものも無し、遇〻之れ有るも多くは一の客室を備へず、勿論食卓臥床の設け無く、旅客は止むを得ず驢馬雜具と土間に雜處し、辛ふじて一夜の雨露を凌ぐに過ぎず。是等は元來潔癖ある本邦人の克く耐ふる所に非ず、此の如くなるを以て旅行者は、食料夜具其他一切の什器を携帶せざる可らず、故に支那内地の旅行は恰も一身にして一家を携ふるの觀あり、其不便なる事言語に絶たり、加ふるに道路の險惡なるは一層此不便を幇助して、困難の度は愈々甚しく、凡そ旅行者として受くべき總ての辛苦は、支那内地の旅行に於て一と支那内地の旅行は恰も一身にして一家を携ふるの觀あり

し て 具 備 せ ざ る 無 し、交通機關の發達も、少なくも社會文明の一材料たるを得べくんば、單に此點のみに於て觀るも、支那は終に未開野蠻の域を脱すること能はざるなり。

漢口より北京に至る大約二千五百清里(凡我四百里に當る)概して支那本部の中央内地にして、近來露人に由て企てられつゝある蘆漢大鐵道は、此沿道を通過するの計畫なりと云ふ、今回　猊下一行が漢口出發より中間二十三日を費し、幾多の困難に耐へ、克く其目的を達せしは亦此道筋に依りたる者なり、旅行中の情況に付ては、以下記するところの日誌により詳にするを得べしと云へども、苟も一宗門の末の徒たらんものは之を讀んで抑も如何なる感かある、是れ深く思はざる可らず、特に一言の注意を添ふる所以なり。

三月十五日　茫々たる二千五百清里、道路荒廢して河川に橋梁無し、是れ既に旅行者に取りて非常の困難なるに、沿道到る處一の客舍と稱す可き客舍無く、遇〻之れ有るも矮少不潔、厭ふ可き一種の臭虫(床虫と稱す)は夜半不時に襲來して害を加ふるあり、加之ならず飲食物の如き二三の土物を除くの外、求めんと欲するも得べからず。　啻に是れのみならざるなり、比年内地不作の爲め人氣甚惡しく、亂民相集りて群を爲し、草賊處々に徘徊して往々劫掠を擅にするものありと聞く、如此幾多の危險は一行の前途に横はれり、一行は此の危險を侵し此困難を排して進まざる可らず。

一行は此危險と此困難とを排して進まざるべからず

出發

午前四時東方微明、一部の先發員は小行李を携へ前驛を望んで進發す。　猊下は同八時旅館を出で日本領

事館に御立寄りあり、小田切領事に別を告げ、直に大知門外に向はせられ、此處に於て少時御休憩、同十一時廿五分御出發あり、領事館員を初め商船會社員、東肥洋行員等十數名と、其他田氏清兵十餘名とを卒ひて此處まで見送れり。

曉發漢口歌　無堂

西藏之山高一萬二千尺。江水發源龍所宅。探險未聞到水源。雲重山疊不知幾千萬曲折。華人言長江天塹。限隔南北不可犯。三國六朝及宋元。紛々豪傑何足論。憑江拒敵亂江擊。蝸牛角上互噬呑。我聞泰西智士眼如火。將用輪船代走舸。若使此學成。七十二峰煤煙鎖。嗚呼古之天險今坦途。五丁可使鬼可驅。慨然作詩投江水。浩歌

細雨霏々として至り衣帽悉く濕ふ

曉發漢口市。漢口より五日程を距る信陽州に至るまでは馬車を通ぜざるを以て、其間は一に馬匹の力に賴らざる可らず、一行は止む無く裸馬に跨り或は荷物の上に乘り、辛うじて進むに、生憎にも此日朝來細雨霏々として至り衣帽悉く濕ふ、寒氣頓に加はりて其困難云ふべからず。大知門外より一帶の道路は道幅二百尺に餘り、中央に三尺許の敷石を甃みたれども、曾て修理を加へし事無ければ頽破甚敷、泥濘屢々馬脚を沒して進行最難む。すべて此邊は所謂千里の曠原にして、絲草空に連り地卑濕にして沼澤多し、聞く夏秋の候霖雨一度至れば、茫々際無しと。一帶の平地忽ち變じて一大湖とな

李家灣

十二時四十分捷徑河の渡頭に着、河幅約五百尺、半濁流なり、一行舟にて渡る、舟中馬逸して一頭水に陷りしも、辛うじて引上げ死せざるを得たり。渡り終り行くこと十清里にして一小驛に達す、李家灣と云ふ、時に二時二十分、先發員預め晝餐を設けて待つあり、入て食に就くと云へども粗糲にして食ふに耐へず、元來本邦に輸入する普通支那米又南京米と稱するは、多く廣東産にして、蘇州杭州産の次にあるものなり、內地産のものに至りては、到底邦人の口に適せず。一同衣帽を乾かし且暖を取らんが爲め焚火を爲さんとするに、燃料の得べき無し、百方求めて漸く數片の木屑と一束の高粱とを得て、僅に火を點じたるも、十分の用を爲すに足らず。三時十五

道士店

大陸日暮の光景凄愴云ふべからず

分此處を發して進む、道路險惡にして進退意の如くならず、之が爲め一行離れ〳〵になりて互に相失し、六時道士店に到る頃は 猊下に隨ふ者とては一兩名に過ぎず、道士店は李家灣を距る三十清里に在り、沿道の一寒驛にして旅舍に充つべき家無きを以て、更に道を急ぐに數里にして日全く暮れ、四顧蒼茫として大陸日暮の光景凄愴云ふ可らず、猊下一兩名を隨へて行くこと二時間餘一村落に達す、隨行員中通譯の任を帶びたる中嶋某は後れて未だ至らず、猊下を始め隨行の者大に困難を窮め、不得止暫く馬を留めて後者の來るを待つ、既にして夜色渺茫の中迫に騾馬の嘶を聞く(騾馬の聲は恰も竹筒を吹く如し)近き視れば武田隨

臭蟲膚を螫して寒夢屢〻驚く

行長馬丁を隨へ馬を飛ばして來るなり。是に於て村翁を雇ひ之に嚮導せしめて行くと六里、幸に陰雲破れ缺月光を放ちて一行を導けり、夜九時張家店に着す。此時一行の疲勞甚敷復一歩を進むる能はず、乃ち路傍の一旅舍に投ず。少焉して後者至る、然れども荷物を保護する爲め中嶋等の三名は後に在りて遂に至らず。旅舍の客室とも言ふべき者は方三間餘の土間にして、食卓寢臺等の設け一もある無く、且塵埃堆積して汚穢云ふ可らず、携帶の行李後れて來らざる爲め、不得止二三枚の席の上に半乾きたる毛布を敷き、十二時漸く寢に就く、臭蟲膚を螫して寒夢屢〻驚く。此日行程漢口より捷徑河迄三十里、李家灣十里、道

土店二十里、張家店十里、計七十清里。

十六日　午前六時後れたる一行の殘部到る、云ふ昨日途中行李を搭載せる一輪車幾度か轉覆し、人馬共に疲勞して馳驅すれども進まず、且支那人は甚しく雨中と日沒後の歩行を厭ふの習慣あり、是等の爲め先隊に追從すること能はず、夜に入りて遂に道士店に一泊し、今朝未明に出發して來れるなりと。一行直に發せんとするに、馬丁等頻りに疲勞を訴へ休息せんとを請ふて止まず、然れども僅一日の行程にして早く既に此の如くんば、茫々たる前途何の日か克く目的の地に達することを得ん、故に斷然彼等が請を斥け、十一時廿五分此處を發して進むに、雲霽れ雨止